

---

# アネモネの翼～真実の愛に目覚めて...

淡雪ぼたん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アネモネの翼〜真実の愛に目覚めて・・・

### 【Nコード】

N4791U

### 【作者名】

淡雪ぼたん

### 【あらすじ】

始まりは愛のない結婚だった。。。心に闇を抱える実業家と、親に愛されなかった薄幸の娘。。。そんな2人に幸せは訪れるのだろうか？ 偽りの愛が真実の愛に変わるまで。。。。

## 第1話 偽りの結婚

私はアネモネの花が好き．．．。  
だけど花言葉は嫌い．．． 儚い夢、薄れゆく希望．．．。

まるで今の私みたいと思い、ついつい可笑しくなってフツ．．．と笑ってしまった。

全然楽しくもないし、嬉しくもないけれど．．．あまりにも惨めな自分の人生が滑稽に思えて来て、自分自身を鼻で嘲笑ってやった．．．。

全然幸せではなかった．．．すごく不幸な気持ちだった．．．心の中はどんよりと厚い黒雲に覆われて、今にも雨が降り出しそうだった．．．。

涙の雨が．．．。  
今泣いたら、土砂降りの雨になりそうで、一生懸命心を凍らせた。心を凍らせる事なんて簡単だ．．．だっていつもそうやって生きて来たから．．．。  
誰も信じないし、誰にも心を開かない．．．それが私．．．。

鏡の前には美しく着飾った、純白のウェディングドレス姿の自分がいた。  
きつと世界一不幸な花嫁だ．．．。  
どんなに綺麗で豪華な花嫁衣装を着ていても、全然美しく見えない．．．。  
暗い闇のような虚ろな目をした、青ざめた顔．．．まるで死人のようにも見えた。  
純白のドレスは私の死装束だ。

こんな魂の抜けた死人を妻に迎える夫は愚かだ．．．。

私には何の価値もない．．．妻に迎えても、あの腹黒い名ばかりの父親の利益に繋がるだけだろう．．．。  
一応戸籍上はあの人の娘と言う事になっているが、親らしい事をし  
て貰った記憶はない．．．。  
私が唯一幸せだと思つた事は、あの人に似なかつた事だ．．．。  
母に似て不幸中の幸いだつたと思う．．．。  
でも、私の体にはあの人の汚れた血が半分流れている．．．そう思  
つたら、ゾツと鳥肌が立つた。  
私を知っている母は、数枚残された写真と一枚の手紙だけで、実際  
どんな人だつたのかは分からない．．．。  
だけどそこに写っている母は、とても美しく清らかな感じの人だっ  
た．．．。

命をかけて私を生んでくれたのだから、きっと勇氣ある素晴らしい  
．．．そして優しい人だつたのだと思つてる。  
母の残してくれたたった一枚の手紙にはこう書いてある。

\* \* \* \* \*

まだ見ぬ愛しい我が子へ．．．。

あなたの事をとても愛しています。

あなたは私の希望です．．．私の子として、この世に生まれて来  
てくれてありがとう．．．。

あなたは私の光です．．．無機質だつた私の人生に喜びの光を与  
えてくれました。

あなたのこれからの人生が、温かな光に包まれた喜びと幸せに満  
ちあふれたものでありますように．．．。  
いつもそれだけを祈って願ひ続けてます。

体の弱い私だから．．．万が一、私の身に何か起きて、あなたをこの手に抱くことが出来なかった時のために、ここに書き記しておきます。

あなたを．．．あなたの事だけを愛しています。

\* \* \* \* \*

母がこの手紙を残してくれて良かった．．．。

最後の『あなたの事だけを．．．』で私は分かった．．．元々政略結婚で愛のない結婚生活だったはず．．．。

あの人（父）の事は愛してなかったのだ．．．。

それでも私を愛してくれた．．．その母の為に．．．どんなに辛い茨の道でも生きていくわ．．．。

そして母の望んだ幸せを見つけて手に入れるね．．．。

私がかから笑っている姿を見たいよね？

私には宝物がある．．．。

残された数枚の写真と、母の手紙と、『幸せノート』。

『幸せノート』には、毎日見つけた小つちな幸せを書き記したり、写真や、絵．．．時々花や、木の葉などを貼ったり．．．。

辛い時に幸せノートを読み返すと、元気が出てくる．．．そして明日も頑張れるから．．．。

\* \* \* \* \*

私が生まれてすぐにあの方は使用人夫婦の所に、私を里子に出し、再婚した。

厄介者を追い出すように．．．。

使用人夫婦は、私を養護施設にサツサと預けて、屋敷を去って行った．．．。

ケチなご主人の子供を預かって、何の見返りもないと思ったのか  
もしれない．．．。

だから私の親と呼べる人は、愛おしい母と、養護施設の先生達だけ  
．．．。優しい先生達だった．．．。

私が唯一幸せだったのは、養護施設で育った15年間だけだった．  
。

幸せは突然奪われるものだ．．．。

高校1年になってすぐ、父親だと言う人が現れ、私の意志も無視さ  
れ、あの人の屋敷に連れて行かれた．．．。

あの人の再婚相手には子供が出来なかったからだ．．．。

他の愛人達にも子は出来なかった．．．。

唯一あの人の血を分けた存在は、結局忌み嫌い生まれてすぐに手放  
した私だけだったのだ．．．。

ドレッサーの前で、つまらない事をあれこれ考えていたら、教会の  
控室のドアをノックする音がした。

「どうぞ．．．」

ガチャリと、ブライダルアシスタントスタッフの女性が入って来た。  
「そろそろ式が始まりますが．．．準備の方は宜しいでしょうか？」

「はい．．．」

菜摘は嘘の笑顔を浮かべた。

きつと回りの人達は、胸いっぱい幸せな花嫁だと思ってるでしょ  
うね．．．。

この世の終りのような、地獄の結婚式もあるんだわ．．．。  
神父さんの前で嘘の誓いを立てて．．．

もしこの世界に本当に神様が居るのなら、神の前で嘘の誓いをこれからたてる私を裁きますか？

- - - - -いいえ．．．神様なんてこの世にいないと思う．．．。

もしいたら、この不幸な私をとくに救い出してくれてるはず．．．

。だから神様なんていない！！

いても私は信じない．．．。

私にこんな残酷な仕打ちをし続ける神なんて！！

教会の式場に入り、名ばかりの父親とバージンロードを歩く．．．。

そして途中から．．．今日から夫となる葉山はやま慎司しんじに受け渡され、腕

を組んで祭壇の前までゆつくりと歩き始めた．．．。

神に嘘の誓いを立てに行く為に．．．。

(第2話に続く)

## 第1話 偽りの結婚（後書き）

フォレストにて発表した『真実の愛』を大幅に書き直して掲載します。



## 第2話 慎司の屋敷へ．．．

バージンロードの途中で、名ばかりの父から今日から夫となる葉山慎司に受け渡されて、腕を組んで祭壇に向う．．．。

一瞬慎司と目が合うが、葉摘を見る目はいつも氷のような冷ややかな目だ．．．。

ああ私は愛されていないんだと再認識させられる．．．。  
お金持ちで、背も高く均等のとれたプロポーション．．．端正な顔立ち．．．女性には不自由しなさそうな雰囲気この男が何故私と結婚するのか．．．。

全てに完璧そうな彼だけれど、肉体的にも心にも大きな傷があった。彼の左足は義足だ．．．どうしてそうなってしまったのかは知らない．．．。

その事が原因なのか？ 彼の心の中を真っ黒い深い闇が覆い尽くしている事を薄々感じていた．．．。

\* \* \* \* \*

偽りの誓いを立て、偽りの結婚式を終え、それを嘲笑うかのように教会の鐘が鳴り響き、扉が開いて教会の外に出ていくと、待ち受けていた参列者達がライスシャワーを一齐に降らせた．．．。  
皆、満面の笑顔で．．．。だけど私の知っている顔はない．．．。  
参列者は殆ど、義理や利害関係の繋がりで行って来た者．．．。それからセレブな彼の友人達．．．。  
1人も私の事を祝福してくれる人はいない．．．。

もし．．．。本当に愛する人ともう一度、本当の結婚式を挙げられる

のなら．．．。

こんな高価なウェディングドレスは要らない．．．安物の白いワンピースに、ベールは白い大きなハンカチーフで構わない．．．結婚指輪は摘んだ花で作った花の指輪で構わない．．．。一緒に養護施設で育った家族のような友達仲間と優しい先生達に祝つて欲しい．．．。

いえ．．．そうしたかったな．．．。

．．．．ぼんやりと施設の事を考えていたら、冷やかな慎司の声で現実に引き戻された。

「何をしている！早く乗れ！！ 式も済んだし家に行くぞ！！」

「あ．．．はい」

教会前に待たせた大きなリムジンに、慌てて乗り込んだ。結婚披露パーティーは日を改めて行なわれると言う事で、今日は式のみ．．．。

このまま今日から住む田園調布の慎司の屋敷に向つ。

．．．．田園調布の屋敷の中でも一際目を引く程の、大きな屋敷だった．．．。

ちよつと明治のレトロな雰囲気も漂わせる、白い洋館．．．。歴史ある建物なのだろうか？

綺麗に手入れされた池や庭園のグリーンがまた良く映えている。広い玄関は2階天井までの吹き抜けとなっており、アンティークな豪華なシャンデリアが下がっていた。

価値のありそうな絵画や美術品などがさりげなく飾られている。

屋敷には、50歳代後半ぐらいの執事 須藤と、輪郭のゴツゴツしたとても固い印象の、恐そうな50歳代半ばの女中頭 西山、それ

に女中が数人．．．。  
成り金ではなく、代々繁栄成功し続けてきた由緒正しい財閥の家系．．．。

15歳まで施設で育った自分とは全く別世界の人なんだと改めて思った。

屋敷に入ると、菜摘は玄関に置き去りにされ、無言で慎司はさっさと自室に入って行った。

代わりに執事須藤が自身の紹介と、女中頭とその他屋敷の使用人達の紹介をし、それから菜摘を部屋に案内した。

部屋に行くまでの途中、大まかな屋敷の間取りなどの説明も受けた。

今日から菜摘の住む部屋は、2人の寝室が2階の最奥の部屋．．．。寝室には、壁面から張り出した美しい織物の天蓋のついたキングサイズベッドが置かれていて、両サイドにはアンティークなヨーロッパアン調のベッドサイドキャビネットにオールヌーボなクラシカルな雰囲気の左右ツインのテーブルランプ、壁面にはアンティークなイギリス製の大きなチェストと壁面には金の細工を施した鏡にアンティークのスタンドシャンデリア．．．。

暖炉の上には部屋の雰囲気によく合いそうな美しい油絵も飾られていた。

落ち着いたヨーロッパアン柄の織物の壁紙に、美しい細工のモールディング．．．。

天井には豪華な彫りの周り縁がグルリと施されて、中央にはオールヌーヴォーなガレ風のシャンデリア．．．。

美しいドレープのカーテンの付いた大きな両開きのフレンチドアを空けると広いバルコニーも付いている．．．。

菜摘が何かの本で見た、貴族の屋敷のようだなと思った。

その部屋のすぐ隣の部屋が、菜摘に宛てがわれた個室．．．。

先程の寝室にも扉で繋がっている。

大きなウォークインクローゼットに、美しい薔薇の彫刻に優雅なカーブのついた猫脚のドレッサーとお揃いのスツール、シノワズリースタイル（17〜18世紀のヨーロッパで流行した中国風のインテリアスタイル家具）のライティンデスクと同じデザインの素敵な椅子……。

ちょっとした昼寝も出来そうな、座り心地のよさそうな、シックなヨーロッパアンカウチソファもある。

壁紙は、淡い色調の薔薇の蕾の織物の輸入壁紙……それに合わせた美しい薔薇の花柄のドレープのカーテン……。

広い洗面台に、映画に出て来そうな素敵なおバスルームも付いている……。ここだけでも生活出来そうな雰囲気だ。

その部屋を見て、あまりの素晴らしさにため息が出た。

でも……美しい部屋だけれど、自分には全く不釣り合いな感じが出て、すぐに現実に引き戻された。

施設から引き取られて3年と少し……。

ケチな名ばかりの父は、私腹を肥やす為に使う政略結婚の駒として施設から引き取っただけ……。

菜摘にこれと言って、服や装飾品など買い与えたりもせず、一応恥ずかしくないように厳しい嗜みのような習い事は沢山習わせたが、それ以外は女中並の扱いだった。

与えられた部屋も、屋敷のはなれの粗末な部屋……。

だから、どんなに広い立派なウォークインクローゼットがあっても、そこに入れるような、これと言った洋服もない……。

小さなポストンバッグひとつでこの屋敷にやって来たのだ……。

名ばかりの父が一番張り込んだのは、ウェディングドレスと、それっぽく小細工する為の習い事の費用ぐらいだ……。

慎司はそんな自分の事を変に思わないのだろうか？菜摘は思った。

慎司の自室や、書斎は、同じ2階にあるが、寝室とは一番離れた真反対の最奥にある。

自分のテリトリーには近寄るな！と言わんばかりに、まるで菜摘を撥ねつけて拒否しているような感じもした。

菜摘は自室に入ると、ウエディングドレスを脱ぎ、がらんどうのウオークインクローゼットに下げた。

そしてポストンバッグから、古びた時代遅れのワンピースを取り出し、それに着替えた。

このワンピースは、アルバイトして稼いだわずかばかりの給与でリサイクルショップで買った服だ……。

暫くしたら、女中がドアをノックして夕食の準備が整ったので、ダイニングルームに来るようにと伝えてきた。

その時に女中がチラリと、菜摘の貧しいワンピースを見て、ほんの僅かだが表情が変化した。

きつとなんて見窄らしい服を着てるのだろう……この主にはふさわしくない妻を迎えたものだと思っっているのかもしれない……。そんな事は気にしない……これが本当の私だから……。

ダイニングルームにおりて行くと、慎司が主の席おしに座って何やら真剣な顔で第一秘書の折原と話していた。

慎司は部屋に入って来た菜摘を見て、あからさまに不快な顔をした。

「菜摘！！その服はなんだ！！」

「申し訳ございません。こんな服しか持つてなくて……」

夫から一言言われるだろうとは覚悟していた……。

自分でもこの家に相応しくない服装だとは思っていた……だが仕

方ない。

「どういう事だ．．．」

「父は私を疎ましく思っていましたから．．．とても質素な生活を送って来ました」

その事を聞いて、慎司の眉がひくりと持ち上がった。

「瀬川らしいな．．．。まあいい．．．早く座れ！！」

「はい．．．」

この場所に相応しくない浮いた自分．．．凄く惨めな気持ちだった．．．。

慎司との夕食は、とても新婚の夫婦とは言えないような、まるで会話のなくなった熟年夫婦のようだった。

これと言って会話もなく沈黙が続き、食器に当たるカトラリーの音が時々聞えて来るだけの重苦しいディナー．．．。

息の詰まりそうな夕食．．．。

菜摘は養護施設での夕食をふと思い出した。

このディナーのように豪華なメニューではないけれど、皆で楽しくお喋りしながらの食事．．．。

笑い声と皆の笑顔．．．。

あの日々の事を思い出すと、心にほんのりと小さな灯火が灯り、少しだけ心が救われた様な気持ちになった。

(第3話に続く)



### 第3話 氷の仮面をつけた夫

菜摘はぼんやりと養護施設の事を思い出していた。

「．．．み．．．菜摘！！」

その時ふと、慎司の声が出て、現実に戻される．．．。

「あ．．．はい」

「何を考えていた」

「あ．．．すみません。施設の事を．．．ふと思い出して．．．」

「施設?!」

「あの．．．私が15歳まで施設で育った事はご存知なのでしょう  
か？」

慎司の非常に驚いた顔を見たら、知らなくて結婚したのだと悟った。

「おまえは瀬川の本当の娘ではないのか？」

「いいえ．．．。確かにあの人は血の繋がった実父ですが、私を生  
んですぐ母が亡くなったなら、私をサツサと施設に預けて自分は愛人  
と再婚して．．．。だから15歳までずっと施設で育ってきました。  
私を手放した後、結局子供に恵まれず、15歳の時に呼び戻されて  
．．．」

「瀬川のやりそうな事だな．．．だが、後継者と呼べる存在はお前



だけで、施設からまた呼び戻されることになって良かったじゃないか．．．」  
フツと冷たい笑を浮かべて皮肉たっぷりな口調で慎司が言った。その冷ややかな笑いが鼻につく。

「最悪です!!」

七瀬のその反応に、慎司の表情が驚いたような感じに変化した。

「あの人は、私腹を肥やす為に私を将棋の駒のように使う為に呼び戻しただけですから．．．」

「ふーん。じゃあ俺と政略結婚させる目的で呼び戻したと言う訳か．．．」

「恐らく．．．慎司さんは何で私と結婚されたのですか?」

「まあ個人的に瀬川には恨みがあったな．．．あいつの大事な娘をいたぶってごみのように捨ててやるうかなと思ったが．．．」  
その時の冷ややかな表情と氷のような笑に、菜摘はゾツとした。

それから慎司はチラと菜摘の顔色を伺ってから．．．。

「だが、おまえも瀬川の被害者だということが分かったから．．．  
放免してやるう．．．」

菜摘はクスリと笑った慎司のその顔が物凄く憎らしく思った。  
(全く何様のつもりなの!!!) 強い嫌悪感を感じた。

「じゃあ．．．瀬川に対して情と言うものは無いのかな?」

「感情の『情』があるとしたら、軽蔑、怒り、憎悪、絶望、嫌悪感  
でしょうか．．．」

「ふーん。じゃあ明日瀬川が逮捕されると思うが、気にしないか．

」。  
「アツサリとそんな事を言いながら、料理を口に運ぶその冷酷さにゾ  
ツと背筋が凍る。」

「えっ?」

「瀬川は、政略結婚でお前を俺に押し付けて、親族関係を結んでM  
& amp; A（企業買収）を仕掛けて儲けようとしたようだが、密  
かにあいつの事を調べて、インサイダー取引の証拠を握って、警察  
に密告してね．．．。明日逮捕状が出て逮捕される予定なんだ．．  
。まあ騙されてるふりをしてやったと言っかね．．．」

「その事には驚いたが．．．あの人の事なんてどうでも良かった．．  
。」

「そうですね．．．私には関係ありませんから．．．。じゃあ私は  
もう用無しですね」

菜摘は、平静を装って、食事を口に運んだ。

「いや．．．」

「えっ?」

「お前の事が気に入ったよ．．．」

「どっという事でしょう? さっき放免するって言ったじゃありません

んか!!」

「いたぶるのはやめたと言う意味なんだが……。俺のかわいい奥さん!!」

「えっ?」

「今晚から可愛がってあげるよ!!」

またあの氷のような笑を浮かべた……。

菜摘はゾワーツとした……。

瀬川が失脚して、その残骸をその手に入れる事が可能になった今、自分には何の価値もないではないか!!

私を虐めていたぶるって、ペットのように楽しむ為に手元に置いて置くのか?

急に食欲が失せて、頭が痛くなってきた。

(第4話に続く)

#### 第4話 初めての夜・その1

夕食の後、菜摘は逃げるように宛てがわれた自室に戻った．．．。  
(慎司さんって．．．凄く恐ろしい感じの人だわ．．．)

気を取り直して、お風呂に入ろうとバスルームに行くと、いつの間にか女中が準備しておいてくれたようで、大きなバスルームのバスタブのお湯には薔薇の花びらがあふれるぐらい浮かんでいた。

「わあ．．．綺麗．．．」

まるでお姫さまになったような気分．．．。  
バスルームにバラのいい香りが広がって、今日の結婚式の事も、先程の息の詰まりそうな夕食の事も、全ての疲れがとれる感じだった。素敵な陶器のボトルに入った高級そうなバラの香りのするボディソープに、シャンプー、トリートメント．．．。

施設育ちの自分には、全てが物珍しくて驚くばかり．．．。

とってもいい香りにうっとり酔いしれるような気持ちで、泡だらけになって、少し熱めのシャワーを浴びた。

それから、薔薇のバスタブにポチャンと浸かった。

花びらを手ですくって鼻にそっと近づけて、臭いを嗅いでみた。

フワーツと薔薇のいい香り．．．。ちょっと嬉しくなって、ふと『幸せノート』の事が浮かんだ．．．。

そう言えば．．．最近辛い気持ちの日が多すぎて、何も書く事が無くてずっと放置してたな．．．。

この事を書こうかしら?と思った．．．。

その後に、あの冷やかな慎司の顔が突然浮かんできてブルツと身震いした。

今夜あの冷酷な夫に? 顔をふるふると振って自分に気合いを入れた．．．。考えても仕方ないじゃない．．．。もう結婚しちゃったんだもの．．．。キュツと心を凍らせた．．．。

お風呂から上がると、高級そうな手触りの良い厚手の可愛い花柄のバスタオルとタオルが準備されていて、シルクオーガンジー生地の美しいレースの付いた素敵なネグリジエと可愛い下着が用意されていた。

「わ．．．可愛い．．．」

まるでお姫様みたいだわ．．．。

「あれっ？でも．．．私の用意したパジャマは何処にいったの？し．．．下着も無い！！」

お風呂に入る前に菜摘が用意したパジャマも下着も消えて無くなっていた．．．。

（私がお風呂に入っている間に女中が処分しちゃったのかしら？）確かに色気も素っ気も無い、シンプルなおレンジエック柄のパジャマだった．．．。それに味気ない下着．．．。

（私になにも聞かずに処分しちゃうなんて！！酷いわ！！まだ着れたのになあ〜）

はあ．．．でも．．．確かにこの家には合わないような、粗末なものだものね．．．。

何で私を妻に？名ばかりの父である瀬川への復讐と、会社乗っ取りは成功して、目的は果たせたのでしょうか？

もう私は用無しではないの？

「いいわよ．．．辛い事なんて慣れてるもの．．．」

髪の毛を乾かして、ネグリジエに着替えて、あの素敵なライティンデスクの机の扉を開いて、引き出しに入れておいた『幸せノート』を取り出した。

ノートは菜摘の大好きなアネモネの花の柄．．．最初のページを開いたら、美しく優しい母の写真が挟まってる．．．。写真をとり出して、ジッと見つめた。

「お母さん．．．私に幸せはやって来るのかな？」

それから丁寧に写真をノートに挟んで、何も書いて無いページを広

げてペンを持った。

「……ちつちやな幸せ……」

「そうだ！今日式を挙げた教会のステンドグラス……」

「綺麗だったな……」

もつとゆっくり見たかったけれど……それどころじゃなかったから……」

写真に撮っておきたかったな……」

光に照らされて、とても幻想的で……その光が教会の中に差し込んで……」

あとは……」

薔薇のお風呂……色とりどりの薔薇が湯に浮かんで……いい香りだったな……」

「なになに……ステンドグラス？ 薔薇の風呂？」

机に座って、あれこれ妄想していたらふと後ろから声がして振り返ったら、いつの間にか慎司が立っていた。

「ギャツ！！ な……なんでここにいますか？」

信じられない！！勝手に人の部屋に入ってきて来るなんて！！

「ベッドルームで可愛い奥さんを待っていたが、一向に来ないから待ちくたびれてね……。逃げちゃったんじゃないかって思ってたね……」

「ここにいますから！！」

「のようだね……」

「人の部屋にノックもしないで勝手に入って来るなんて．．．酷いじゃありませんか!！」

「ノックはしたが、夢中で何か書いててまるつきり聞えなかった様子だったけど．．．」

「で．．．でも．．．勝手に入ってこないで下さい!！」

「まあ．．．気にするな．．．で．．．これはなんだ？」

「笑いませんか？」

「俺の顔を見て見る!！この顔が笑ってるように見えるか？」  
「つい慎司の顔をジッと見た．．．相変わらず冷ややかな顔だ．．．」

「笑ってません．．．ね」

「で．．．なんだ？」

「『幸せノート』幸せだなんて思った事とか、楽しかった事とか．．．  
．．．そう言う物を書き留めておくんです」

「ふーん。じゃあ今日の結婚式の事とかも？」

「それは．．．」

なんて言っているのか言葉につまってしまう．．．。

「まあ．．．深く追及はやめておこう．．．ベッドルームに早く来いよ!！」

そう言っって慎司は隣のベッドルームに消えていった。

「ふーっ。ビックリしたわ．．．」  
ノートを閉じて、引き出しにしまった．．．。  
そして、諦め気分で寝室に入っていった。

（第5話に続く）



## 第5話 初めての夜・その2

意を決して、寝室に向う扉を開けて恐る恐る部屋に入って行った。慎司は義足を脱いで、それをベッドサイドキャビネットに立て掛けて、痛そうに足を擦っていた。

その様子を見たら、先程までのドキドキした気持ちも、憂鬱な気持ちも何処かに吹き飛んでしまった。

「痛みますか？」

「時々ね．．．長時間立つてると健康な足の方にも負担がかかって今日はちよつと浮腫んでしまったよ」

「マッサージしてあげましょうか？」

「この足を見て気持ち悪いとか恐いとか思わないのか？」

「正直ちよつと驚きますが、気持ち悪いとかそんな風には思いませんよ」

「じゃあ頼むよ．．．ときどき酷く痛んでね」

「じゃあ浮腫んでいる足の方から．．．」  
菜摘はバスルームに行つて、綺麗なタオルをとってきて慎司の足に乗せて、擦った。

普段何も考えずに過ごしているが、慎司にしてみたら健康な足の方の負担は大きいだろう．．．。

一生懸命擦つてあげたら気持ち良くなったのか、寝てしまった。なんだかちよつとホツとしたりして．．．。

「寝てしまったと思って、安心したでしょう？」  
その声に一瞬飛び上がった。

「起きていたのですか？」

「目はつぶってるけど、まだ起きてるよ。足が凄く楽になったよ。  
反対の方も頼む・・・」

「なんか痛そうで恐いです・・・」

「痛かったら痛いって騒ぐから大丈夫だよ」

「はい」

恐る恐る、膝下から切断された足の上にタオルを乗せて、優しくさすった。

「大丈夫ですか？」

「上手上手・・・凄く楽だよ・・・」

それからポツリと慎司が足に付いて話し始めた。

「5年前に、弟の運転する車でね崖からからダイブしてさ・・・こ  
うなった」

「えっ？」

「気になってたでしょ？足の事・・・」

「実をいうと・・・でも、聞いていいのかどうかと思って・・・」

「まあ気にしてなくもないが・・・隠す事でもないしね。その弟は

腹違いの弟でさ．．．俺を道連れにしようとして、俺は奇跡的に助かり、あいつ1人死んでいったよ．．．」

「そんな事が．．．」

「同情した？」

「色々辛い目にあつたのですね」

「菜摘つてさ．．．なんか俺と同じ色をしてるっていうか．．．そんな気がするよ．．．」

「えーっ．．．私、慎司さんみたいにそんな腹黒じゃないですよ」

「こいつー!!」

そう言つて、慎司にコツン!と小突かれた。

「お前の事気に入ったから、お前が本当に好きになるまで無理に襲つたりしないから安心しろ!!」

「えっ？」

血も涙もない冷酷な人間だと思つていたけれど、人の痛みの分かる人なんだとその時思った．．．。

「おれもまだ菜摘の事を愛してるとか、恋愛感情を抱くまでには到つてないしね．．．。だけど、優しい子だつて言う事が分つたよ。それに妄想癖のある可笑しな子だつて事もね．．．」

「ええーっ．．．」

妄想癖?! 恥ずかしくなつて赤くなつた．．．。

「だからお互いに本当に好きになった時に、本当の夫婦になるう．．．」

「はい．．．」  
「良かった」。

「今、良かった．．．って安心したでしょ？」

「えっ？」

「分かり易い奴だ．．．。そうやって油断していると襲つかもしれないぞー!!」

うーん。確かに．．．気をつけないと．．．。でもどうやって？

「また妄想してるな．．．。もう寝るぞー!! 今日のは疲れたー!!」

「はいっ」

それから慎司はすぐに寝てしまった。  
ホッとして菜摘も睡魔が襲ってきた。

いつかは『幸せノート』に彼の名前を書き記す時が来るのだろうか？

(第6話に続く)



## 第6話 はじめて迎える朝

菜摘は、昨日の緊張感と疲労感と無理矢理襲ったりしないと言われた安心感?!から、すっかり熟睡してしまった。

翌朝、そろそろ目が覚めそうな夢うつつ状態の中で、何か柔らかい物がふわつと唇に触れた感触がした。

「んっ……」

「お姫様……そろそろ起きよう」

「うーん……んっ?!」

また何かが唇に触れてる?!

「きゃっ?!」

目を空けたら至近距離に慎司の顔があった。

「やっと起きた?」

ニヤツと意地悪そうな笑の慎司……。

「今のは……も……もしかして……?」

「そう……眠り姫を目覚めさせる王子様のキス!!」

「うそーっ……し……信じられない……昨日襲わないうって約束したじゃありませんか!!」

「戸籍上、俺達はすでに夫婦なんだよ、キスぐらいで大袈裟だな。キスは挨拶みたいなものでしょう?」

それに狼と一緒に一晩過ごして、よくそんなに寝れるものだね」

確かに．．．昨晩は本当にグッスリ寝れたわ．．．。  
いつの間にか起きたのか？慎司はすっかり身支度を整えて立っていた。  
「本当に朝寝坊な奥さんだ！！一緒にモーニングを食べようと思  
つてずっと待つてるんだよ．．．」

「はあ．．．す．．．すいませーん！！」  
時計はすっかり朝の8時を回っていた．．．。  
ベッドから飛び降りて、急いで洗面所に駆け込んだ。

そんな姿を見てクスリと笑う慎司．．．。

こんなに寝坊しちゃうなんて．．．私にしては珍しいわ．．．よっ  
ぽど疲れてたのかしら？

でも、慎司さんと一緒に寝て、あんなに寝れるなんて．．．。自分  
でも信じられなかった．．．。  
唇に慎司のぬくもりがまだ残っていて、早く波打つ胸の鼓動がなか  
なか治まらない。

ふと見たら、素敵なワンピースがハンガーに吊るされてて、その傍  
のバスケットには下着も置かれていた。

「わあ〜っ。可愛い．．．これを着なさいって言う事なのね．．．」  
幅広のレースの縁取りが愛らしい、淡いローズカラーのシフォン生  
地のワンピース．．．。

クルリと回ると、ひざ上ミニ丈のスカートがフワ〜ッと舞う．．．。  
慌てて身支度を整えてダイニングにおりて行くと、慎司が席に座っ  
て待っていた。

菜摘のワンピース姿を見て、ふっと優しい顔に変わった。

「あの．．．このワンピース．．．慎司さんが？」

「まあね．．．急いで手配させた。昨夜のネグリジエもなかなか良かったよ。目の保養になった!!」  
「そう言つて、意地悪そうに笑つた。」

(ドキッ!あのネグリジエも?慎司さんの趣味?!)

「さあ、早く食事して．．．今日は思いきりショッピングに行くからね!!」

「ショッピングに？」

「まさか瀬川が実の娘に、あそこまで似酷い仕打ちをするとは思わなかったよ．．．。西山に聞いたら荷物がポストンバッグひとつだつて? 政略結婚だつたし、君にそんなに関心が無かつたから気付かなかつた．．．。昨日の夕食の時の服は見れたもんじゃなかつたよ．．．。」

「あれ．．．捨てちゃつたのですか？」

「ああ．．．処分させた」

「私に聞かずに捨てちゃうなんて．．．酷いじゃないですか!!」

「あんなの着て歩かれたら、俺が恥をかくんだよ!! 葉山家の妻としての自覚を持ってそれなりの格好をして欲しいものだね!!」  
「ちよつと刺々しい言い方だつた。」

「そっか．．．。」



自分が恥をかくから、服を用意させたのね．．．。

「わかりました．．．慎司さんが恥をかかない様に、私が持ってきた服は全部捨てておきます」

シヨンボリしながら俯いて、朝食の料理をチビチビ口に運んだ。

それから特に会話もなく、菜摘も慎司と目を合わせず黙々と食事をした。

食事を終え、自室に戻ると、力が抜けたようにカウチソファに座り込み、暫くボーッとした。

『俺が恥をかくんだよー!!』

刺々しい慎司の言葉と、冷やかな顔が浮かんでくる．．．。私を喜ばせようと思って、用意してくれたんだなんて勝手に思い込んで、すっかり舞い上がってしまったって、本当馬鹿だったわ．．．。菜摘はポストンバッグから持ってきた服を全部引きずり出して、ごみ箱に押し込んだ。

最後に残った空っぽのバッグを見ていたら、「こんな見窄らしいバッグ．．．俺が恥をかくんだよー!!」ふと慎司の顔と声が浮かんできた。

バッグもごみ箱にギューッと押し込んだ．．．。

私に残った物って、あの『幸せノート』だけなんだわ．．．。胸がキウンとなったので、心を凍らせた．．．。

いつもなら上手くいくのに．．．今日は何故か上手く凍らなくて、モヤモヤする気持ちが治まらない．．．。

「慎司の馬鹿!!」

側にあつたクッションを掴むと、力任せに扉めがけて投げつけた。

『ドンッ!』といい音がして、『ドサッ!』と床に落ちた。

「厚手のいいクッションだから、いい音がするわ!! スッキリする

「！！」

ちよつと気持ちがあつきりした。

「慎司の傲慢野郎！！」

二つ目を手に持って、思いつきり投げつけた。

『ドカツ！！』今度は更にいい音がした。

「ふんっ！！今度は慎司さんの写真を貼って、当ててみよう．．．」

「へえっ．．．俺の写真を貼ってね」

またあの寝室と繋がっているドアを開けて、腕を組んで壁にもたれて、面白そうな顔で慎司が見ていた。

「また人の部屋に勝手に入ってきて来て．．．。本当に失礼な人ですね！！」

「君の部屋から凄くいい音が聞えて来たから何事かと思つて様子を見に来たただだよ。かわいい奥さんに何かあつたら大変だろ」

「はいはい．．．そうですね。慎司さんのお望み通り、全部捨てましたから．．．」

「傷つけちゃった？ごめん。機嫌を直して．．．早く出かけよう．．．。お詫びに好きな物を沢山買ってあげるから．．．」

内心あまり気が進まなかつたけれど、全部捨ててしまつて本当に着る物が無かつたので、諦めて付いていく事にした。

(第7話に続く)

## 第7話 2人でショッピングデート?!・その1

ガレージに行くと、色々な外車が並んでいた…。まるで外車の博物館みたいで、菜摘はとても驚いた…。慎司さんって…。何から何まで自分とは桁違いの生活レベルを送ってる人なんだと再認識した。

その中から2人乗りのスポーツカーのドアを開けて、助手席に座るように言われた。

「俺の運転は怖い？」

「いいえ…。恐くありません!!」

「そう…。良かった」

菜摘は、何となく含みのある言い方だなと思った…。慎司さんの足が悪いからって、運転疑ってませんから!!。本当に下手だったら乗りたくないですけどね…。

「行こうか」

ガレージから出て、屋敷の前の綺麗に街路樹の植えられている閑静な道路を少し走り、そこから広い片側3車線の街道に出てデパートに向う。

渋滞でなかなか入れそうにないような道でも、魔法のように滑らかに合流…。とても運転がうまい!

人の多い危険な場所や、見通しの悪い所はゆっくり安全運転。

ハンドルを握るとその人の本性が現れるというけど、本当はとも

穏やかな人なんだという事が伝わってくる。

菜摘はチラと慎司の運転する姿を見て、ちょっとカッコいいかも．．．  
．．．と思った。

「菜摘は免許もってるの？」

「殆どペーパードライバーなんですが、一応持ってます。車を運転する機会も無かったですし、都心の道路は車線も多いし、合流もあるから恐くて乗れませんけど．．．」

「慣れだよ。車買ってあげるから、乗ってごらんよ」

「え．．．恐いです」

「恐がりだな．．．思い切って乗ってみなよ．．．初めは少し恐いかもしれないけれど、乗って見たら案外なーんだ。こんなものかっ  
て思うよ」

「そうですかね．．．じゃあ．．．乗ってみようかな？」

「そうそう．．．何でもチャレンジだよ」

「はあ．．．」

いつの間にか、モヤモヤも薄れてきて、普通に慎司と話している自分に気がついた。

こう言うのって．．．デートって言うのかな？ふとそんな事を思った。

\* \* \* \* \*

大手老舗デパートに着く。

駐車場もお得意様専用スペース、店内をぐるっと見て回るのかと思つたら、お得意様専用ルームにそのまま通された。

「妻に合う服を色々見繕って欲しいのだが・・・」

「かしこまりました」

お得意様専用担当の40歳前後ぐらいの女性店員は、イタリアとかその辺りのブランド物だろうか？洒落た落ち着いた黒のスーツに、さりげなく素敵なおアクセサリーを付け、とても上品な雰囲気の人だ。こつと言つた雰囲気になれない菜摘はひどく恐縮して緊張して、落ち着かない気持ちになる。

慎司が自分の事を『妻』と呼んだので、私達夫婦なんだと改めて思つた。

慎司から『妻』と呼ばれると、慣れないせいか、ドキツとする。

まず菜摘のサイズを採寸してから、大まかな好みなど聞かれて、長い物干し竿程ありそうなキャスター付のハンガーラックに下げて、ズラツと服を持って来た。

それも1台ではなく信じられないの数持ってきたので、とても驚かされた。どれも品が良さそうで、高そう・・・。

それを次々とお買い上げしていくから、ちよつと映画の『プリティーウーマン』を思い出した。

私もそんな感じ？あの映画はハッピーエンドで終つたけれど、私はどうなのかしら？慎司さんの事まだどう思ってるのか分からないわ・・・。

○ 普段着を選ぶのだけでもグツタリ疲れたのに、お買い物は続く・・・

「パーティー用のドレスやスーツなども頼みたいのだが．．．。それから、靴やアクセサリーバッグなど一通り頼む」

「かしこまりました」

「着物と小物類も頼む．．．」

「かしこまりました」

お茶を頂きながら、服やドレスや着物を選んでいく．．．。良く分からないので苦手なものだけ伝えて、あとはお店の人と慎司に任せた。2人のセンスは抜群と言う感じだ．．．。それに菜摘はあまりそんなものには興味がなくて、欠伸しそうなぐらい疲れて来た。

結局、え．．．これ全部買うの？と思える程購入した。後で自宅に届けてくれるらしい．．．。

あのがらんどろだったウォークインクローゼットが、一杯になりそうだなと思った。

旅行用のスーツケースやら、捨ててしまったバッグの代わりに買ってくれるのか？可愛いポストンバッグも買ってくれた。

オシャレなバッグも色々．．．。

はあーっ。終わった．．．。と思ったら、今度は手に白い手袋とガードマンを引連れて来た宝飾専門の店員がズラリとアクセサリーを持ってきた。

もう笑顔もかなり引きつっていたと思うけれど、我慢して、お任せで選んでもらった。

こんなに沢山買って、家が破産しませんか？と心配してしまいそうな気持ちになったが．．．。彼にとってはそんなに痛くも痒くもないぐらいの金額なんだわと感じた。

やっとお支払いまでこぎつけた．．．。

支払いの時に、セレブのお買い物は、カードか小切手が当り前なん

だと菜摘は思った。

セレブのお買い物は忍耐．．．ふとそう思った。

「何か他に欲しいものはあるか？何でも言ってくらん」

まだお買い物するの？と思ったが、好きなものと言われて嬉しくなつた。

「ミシンとか、ソーイングの道具とか．．．製菓の道具とか、画材が欲しいのですが、いいですか？」

ちよつとおずおずしながら、聞いて見た。

「もちろん．．．。アクセサリーとか、そういう物は要らないのか？」

意外な物を欲しがるので、慎司がちよつと驚いた顔をした。

「私．．．そう言う物は興味ないですし．．．さっき選んで下さつた物だけでもう十分です」

「そうなんだ．．．」  
目が点になって、ジーツと見つめられたので、私変な事言つたかしら？とちよつと不安になった。

「あのおくお店の中を見て回つてもいいですか？」

折角来たのだから、お店散策したい．．．。

「いいけど．．．じゃあ好きな物があつたら、彼女に言いなさい。

私はここで待つてるから．．．」

「あ．．．はい」

慎司さんって．．．外だと『私』って言うんだ．．．ちよつと大人

びて感じる．．．。

お得意様専用の店員が付き添って、一緒にお店の中を回る事になった。

「あの．．．」

「ん？」

「ミシンとか、少し値の張る物を頼んでも、本当にいいのですか？」

「大した物じゃないじゃないか．．．好きな物何でも選んで構わないよ」

大した物じゃないんだ．．．。私にはなかなか買えないものなのに．．．  
．．．違うな．．．。でも嬉しかった。

「ありがとうございます」

洋服とかアクセサリーを選んでいる時には、あくびが出そうなくらいあまり乗り気じゃないような様子だったが、水を得た魚のように目が輝いた。

菜摘の買った物は、ソーイング用品、画材用品、製菓用品．．．彼女の趣味と言える物ばかり．．．それもそれ程値の張る物では無かった．．．。それでもその喜びようが半端ではないくらい嬉しそうだ．．．。

本当に面白い子だ．．．今まで自分の回りにはいなかった子．．．。慎司は菜摘に魅かれ始めている自分をふと感じた．．．。

\* \* \* \* \*

お買い物の後、また車に乗って洒落たイタリアンレストランに行く。



すでに予約してあったようで、駐車場に着くとお店の支配人が出迎えてくれ個室に通された。慎司の屋敷もため息が出そうなほど素晴らしいが、このお店も凄いなと菜摘は思った。

「素敵なお店ですね．．．」

「気に入ってくれた？」

「はい．．．凄く素敵です。慎司さんは本当にセレブなのですね。私には初めての事ばかりで恐縮してしまいます」

「だんだんこの生活にも慣れて行くよ」

「はい．．．」  
本当にこのまま妻として慎司の元にもいいのだろうか、菜摘は思った。

あまりにも価値観とか、育ってきた環境が違いすぎていて．．．なんというか．．．先々に不安も感じる。

「何か食べたいものはある？」

メニューを広げたらイタリア語が目飛び込んできて、菜摘は驚いた．．．。

勿論日本語で下に小さく説明書きもあるが．．．目がショボショボして来そうだ．．．。

”Spaghetti alle vongole”が目に入って、ちよつと良かった．．．と思った。

．．．私の好きなメニュー．．．。

「塩味のボンゴレが好きなのですが、いいですか？」

「いいよ。ボンゴレが好きなんだ」

「はい。ボンゴレはトマトよりもバターとガーリックの効いた塩味、トマトの時はシーフードの入った漁師風のが好きです」

「ペスカトーレだね」

「そうそう……。ペスカトーレ？ あれ？ ペスカトーラ？」

「実は俺も良く分からない。英語名で書くと”pescator a”だけど、どっちが正しいのだろうね」

「わあ。突き詰めてみると難しいですね」

「イタリア料理好きかな？」

「はい。施設でも時々作ってました。パスタは細麺で、ゆで時間6分のが好きで……。ちよつと芯が残るぐらいに固めが好きで……。あ……。こつ言う所で、施設の話しなんて……。すみません」

「謝らなくてもいいよ。施設の生活は辛くなかったの？」

「みんな優しくして……。15年間幸せでした……。」  
「菜摘の顔がホワツと明るくなって、慎司は何となくホツとしたような気持ちになった。」

「あ……。ワイン飲むでしょう？」

「えっ？ 私まだ未成年だから飲めませんよ」

「ええっ．．．ちょっと待てよ！！菜摘って今何歳？」  
今ままであまり関心をもつてなかったので、実の所、菜摘が何歳なの  
かも把握出来てなかった慎司だった．．．。

「私まだ18歳です。あ．．．7月で19歳になりますが．．．」

「嘘だろ．．．」

慎司は物凄くシヨックを受けている感じだった．．．。

「そうだったんだ．．．。菜摘の事、襲わなくて良かったよ．．．。  
犯罪者になるとこだった．．．」

「夫婦なのに犯罪者になるのですか？」

「あ．．．そうか．．．。じゃ早速今晚．．．」

「そう言うのって親父ギャグっぽくないですか？」

苦笑いで少し顔を赤く染めて菜摘が困り顔．．．。

「考えたら．．．菜摘と10歳違いか．．．28歳だとおじさんに  
やっぱり見えるのかな？」

「うーん。見えるかも．．．」

その途端ガクツと落ち込む慎司．．．。

その様子に菜摘が大笑いした。

「こんなオジサンが夫でいいの？」

「別に嫌だとは思ってないですけど．．．。私みたいな施設育ち

の庶民が奥さんで構わないのですか？」

「俺はこんな若くて可愛い子が妻だなんて嬉しいけどね・・・」

「じゃあ別にいいですけど・・・」

「いいの？」

「だってもう戸籍上は妻じゃないですか!..!」

「本当に嫌だったら別れてもいいけど・・・」

その途端に菜摘がちよっと淋しそうな顔をした。

「慎司さんは別れたいですか？」

「俺は別れたくないな・・・」

「どうして？」

意外な返事にとても驚く。

「なんか菜摘に魅かれてきてるし・・・」

「えっ?」

本当に?なんか信じられないような気持ちだった・・・。

(第8話に続く)

## 第8話 2人でショッピングデート?!・その2

-. -. -. 別れたくないな . . . 菜摘に魅かれてきてるし . . . .

その言葉に非常に驚いた。本当にこんな私の事を？

「ちょっと驚いています。愛のないただの政略結婚だって割り切るような気持ちでしたから。

慎司さんの事 . . . 嫌いじゃありませんけど . . . 正直まだ自分の気持ちに分からなくて . . . .

あの人（父）に恨みがあるって言ってましたよね？」

「ああ . . . 卑劣な方法で会社を乗っ取られそうになってね . . . それも年数をかけてうちに気付かれないように、ジワジワと外堀を埋めるように . . . 外堀が埋め終わったら、今度は兵糧攻めで . . . . 犯罪ストレスの、あらゆるあくどい手を使って来たよ . . . .

気がつけばにっちもさっちも行かないような状況まで追い込まれて、その事の心労で父は心臓を悪くして亡くなっね。

俺が会社を嗣いで、懸命に建て直しを図っていた矢先に、あの義理の弟の事があって、母も過剰なストレスで体調を崩して亡くなってしまっ . . . . 本当にあの時は精神的にも肉体的にもきつかったよ . . . .

どうしても瀬川の事が許せなくて . . . 復讐の機会をずっと狙ってたんだ . . . .

そんな時に、瀬川が娘を政略結婚させて、事業拡大を狙っていると言う情報を耳にして、すぐ飛びついたんだ . . . .

あれから私も心血そいで必死に会社を建て直して、父の代と比べたら比較にならない程、会社は大きく成長していたし、とても魅力的だったと思うよ . . . .

何か瀬川の弱点はないかと必死で探りを入れて、もともと叩けば埃

の出るような人物だったから、わりと簡単にインサイダー取引の情報と証拠を掴んで、警察に横流しした。

君にとつては血の繋がった父親だから、気分も悪いだろうし、私も心が痛まない訳じゃないんだよ．．．だけどどうしても許せなかつたんだ。

目的を果たせたら、もう君は用無しだと思っていたけれど、俺の工ゴだと思っけれど、君の事を知れば知るほど手放したくなくなってしまうた．．．。他の奴には渡したくないって言うかね、独占したような気持ちというか．．．」

その言葉にドキツとした．．．。

．．．．他の奴に渡したくない．．．独占したい気持ち．．．。

「私．．．どうしていいか分からない気持ちでとまどってます。

高校1年になってすぐに、父と言う人が現れて、私の気持ちなど全く無視されるように引き取られて．．．それまで念願の希望高に入学出来て、さあこれからだ！！って夢いっぱいだったのに．．．お嬢様高校に編入させられて．．．。

ブランド物がどのとか、自分の婚約者がどのぐらい金持ちだとか．．．つまらない人達ばかりで．．．。何処で仕入れてきたのか、施設育ちだって広まって、虐めにもあったし．．．。正直セレブの人なんて嫌いだって思ってたし．．．。

高校卒業したらいきなり結婚しろだなんて言われて．．．。

あの結婚式の日はこの世の終りのような、絶望のような．．．私のお葬式なんだって思ってた。

でも．．．こうやって一緒に暮らして、慎司さんの事、そんなに嫌いじゃないなって感じてます。

ですが．．．私．．．恋愛経験もないし．．．何がなんだか分からない状態で．．．この先どうすればいいのかも分からなくて．．．本当に戸惑うばかりで．．．」

「焦らなくていいよ．．．一緒に暮らして行って、ゆっくりこの先の事を考えて行って、2人で結論を出していかないか？ どちらかがもうダメだと思った時に、はっきりと決断を下すと言う形で．．．  
どうかな？」

「はい．．．」

「一緒に生活してみて、お互いいい関係を築けそうだったら、本当の夫婦としてやっていかないか？」

「わかりました」

「それまでは襲わないから安心して．．．」

「は．．．はい」

「じゃあ菜摘はソフトドリンクで．．．俺はワインで乾杯！！」

「あ．．．あの車は？」

「代行頼んだから気にしなくて大丈夫だよ！！」

「あ、はい．．．。じゃあ乾杯！！」

お互いにグラスを傾けて、軽く鳴らした。

\* \* \* \* \*

あれから屋敷に帰って来たら、もう荷物が届いていて、女中頭の西

山と女中達が荷物も片付けておいてくれたらしく、ウォークインクローゼットの中は綺麗に整理整頓されていた。がらんどうだったクローゼットの中が、色とりどりの洋服でいっぱいになっていて、やはり嬉しい気持ちになる。

ミシンやロックミシンは素敵な木の作業机が用意されててその上に置かれてて、小物類は棚や小分けケースに綺麗に整理整頓されてて、お買い物を済ませ、食事をして戻って来るまでの短時間の間に、良くこれだけ綺麗にと感心してしまった。

クローゼットの中を見て驚いた事が一つ。。。菜摘が捨てたはずの衣類とポストンバッグがクローゼットの端っこに置かれていた。

バッグの中を見たら、衣類は綺麗に洗濯されてアイロンがけされて。。。バッグも綺麗に拭いてくれたようだった。。。。

菜摘が酷く傷ついてしまった様子を見て、元に戻しておくようにと、慎司が指示したようだ。

「本当は優しい人なんだわ。。。」「バッグや衣類にはそれ程未練は無かったが、この優しい気持ちが凄く嬉しかった。

まだ気持ちははっきり決まった訳ではないけれど、このまま生活していいたら、本当の夫婦としてやっていけるかも知れないとそんな希望と自信が湧いて来た。

『幸せノート』に、ショッピングの事やイタリアンランチの事などを色々書いた。。。。

(書く事が色々あると言うのは嬉しい物だわ。。。)

バスルームに行ったら、今日のバスタブの湯はラベンダー風呂だった。。。。

毎日日替わりなのかしら？



ラベンダーのいい香りがバスルームに広がる……。もしやと思っ  
たら、ボディソープやシャンプーなどもラベンダーに変わっていた。  
。。。

「凄いわ……」

こんなに幸せでいいのかしら？

慎司との結婚生活は、辛いものだろうと覚悟していたのに……。大  
切にされて拍子抜けしたような気持ちだ……。

幸せに慣れてない菜摘にはちょっと恐いような気持ちにもなった。  
。。。

どうか幸せがこのままずっとずっと続きますように……。

(第9話に続く)

## 第9話 悲しみの結婚披露パーティー

今日は屋敷で結婚披露パーティーが行なわれる日。

招待客は慎司の関係の人ばかりだ。。。

菜摘は、実父が逮捕されて肩身の狭い気持ちだが、結婚式からあまり日を空けるのもどうかという事で、また、慎司ぐらいの大きな企業の社長となれば、やらないと言うわけにも行かず、従う事にした。

ビュッフェスタイルの立食パーティースタイルで、屋敷の大広間で行なわれる事となった。

招待客の中で、慎司の仕事関係の人達は、穏やかで優しい和やかな雰囲気、温かな心のこもったお祝いの言葉を色々かけてくれたが、慎司の友人関係の人達は、口ではお祝いの言葉をかけてくれるが、冷やかな目で品定めする様な視線を感じた。突き刺さるような視線が辛い。。。

「慎司久しぶり。。。」

慎司と一緒に招待客1人1人に挨拶に回っていたら、友人らしき人が近付いてきた。

「おお黒沢。。。」

「いきなり結婚したから驚いたよ。。。」

黒沢と言うこの男は、慎司とは幼稚園からの友人であり幼なじみでもある。。。

その幼稚園は、お金持ちの御曹司や令嬢が多く通っている、幼稚園からエスカレーター式で大学まで行ける有名な私立の学校で、著名

人も多くこの学校を出ている。

黒沢は幼稚舎からエスカレーター式でそのまま大学に上がったが、慎司は大学は国立大の経営学部を受験し、その大学に進んだので、黒沢とは高校まで一緒だった事になる。

見るからに良いとこの子息という感じで、少し意地悪そうなアクの強そうな雰囲気のある男だ。

「あ．．．初めまして．．．慎司の幼なじみの黒沢です」  
品定めをするように見ながら、菜摘に挨拶してきた。

「あ．．．初めまして．．．この度はお越し下さりありがとうございますございました」

菜摘が挨拶終るか終わらないかぐらいで、眼中にありませんのように目を反らし、慎司に話しを続けた。

「仲間皆に声をかけて、理緒も呼んで来てるんだけど．．．不味かったかな？」

『理緒』と聞いて、慎司がピクリとなった。  
だが気を取り直したように、平静を装って、「いや．．．別に構わないよ」と言った。

．．．．理緒さんっていったい誰なんだろう？

「彼女がさ．．．ちょっと話しがあるようんだけど．．．」  
黒沢がチラッと菜摘を見てから、慎司にアイコンタクトで遠くの方に立っている女性に目配せした。

その視線の先には、華やかで綺麗で、生まれながらにして上流家庭のお嬢様という雰囲気的女性が立っていた。

．．．．その人が理緒さんなのですか？

「ゴメン．．．ちょっと席外してもいいかな？」  
申し訳なさそうな顔の慎司。

「あ．．．はい」

不安だったが、嫌だなんて言える訳がない．．．。  
菜摘はポツンと置いて行かれ、慎司はその女性の所に行き、一緒にテラスの方に出ていった。

黒沢と言う男と2人になってしまつて、どうしていいのか分からな  
い．．．。

だが黒沢の方から話しかけてきた。

「菜摘さんつて言いましたよね？」

「あ．．．はい」

「お父さんの事大変でしたね．．．。慎司もよく離婚しなかつたな  
つて、驚いてるんです。やっぱりこんなに若い子だからかな？」

「父の事では本当にお騒がせして．．．」

「前の会社乗っ取りの件でも深く関わつてるんですよ。あの事が  
なかつたら、悪い事も起こらずに、理緒と上手くいっていたんじや  
ないかつて思つて．．．実はこの結婚にはちょっと不満つて言うか  
．．．。

あ．．．言いたい事言つてすみません。だけど、慎司とも理緒とも  
幼なじみなもので．．．昔から2人の事は知ってるから．．．つい  
つい嫌みを言いたくなつてしまつて．．．」

「あの．．．慎司さんとテラスに行った、あの女性が理緒さんです

か？」

「そう．．．。東和商事の令嬢で、綺麗な人でしょう？こう言っちやなんだけど、菜摘さんって令嬢って感じじゃないし．．．慎司があなたみたいな人を選ぶだなんて思っても見なくて驚きましたよ。理緒との事が破談になって、自棄起こしたのかなあ？」

「破談って事は．．．婚約してたのですか？」

「そう言う事．．．」

なんかショックだった．．．。

「それじゃあ．．．」

黒沢が立ち去った後、間髪を入れず、後ろの方から声が聞えて来た。

『ねえ．．．あの子が結婚相手の子でしょう？』

『なんか．．．パツとしない感じよね』

『父から聞いたけど、生まれてすぐに母親が無くなって、父親の方がすぐに手放して、ずっと施設で育ったらしいわよ．．．』

『うそ．．．。信じられない．．．慎司さんがそんな人と？』

『絶対に理緒の方が良かったわよね．．．』

とても聞くに堪えない言葉がポンポンと飛び交って、菜摘はこの場から消えたいような気持ちだった．．．。結局あのまま慎司はなかなか戻って来なくて、最後の挨拶の時にやっと戻って来たような状態だった。

戻って来た慎司の様子は、明らかに変だった。

．．．．何があったのだろうか？

\* \* \* \* \*

その日の夜の事だった．．．。

なかなか眠れない様子で、慎司が真夜中に起き上がって、松葉づえをつきながら寝室を出ていった．．．。

なかなか戻ってこないの、菜摘はとても気になって、ベッドから起き上がり、ドアを開けて首だけ伸ばして外の様子を見てみたら、一番奥の慎司の書斎部屋から明かりが漏れていた。

その部屋の前に行き、開いたドアの隙間から様子を見たら、慎司が机の引き出しから何やら写真を取り出して、暫く眺めてる姿が見えた．．．。

「慎司さん？ 寝れないの？」

思い切って声をかけてみた。

「あ．．．起こしちゃったかな？ごめん  
ちよつと慌てた様子．．．。

「何を見てたのですか？」

「ああ．．．何でもない、気にしないで．．．さあ寝ようか」

悪いなとは思いつながら、あの日の事がどうにも気になって、慎司が出かけてて、執事や女中達も側にいない時間を狙って、書斎に入っ  
て見た。

「確かこの引き出しだったような．．．」  
いけない事とは分かっているけれど、とても気になって気持ちが抑

えられなかった・・・。

ドキドキしながら机の引き出しをそつと開ける・・・。

出てきたのは、3人が写る写真だった。

慎司さんと、同じ年ぐらいの男性と、中央に綺麗な女性・・・。  
理緒さんだった・・・。

なんだかとても悲しくなった・・・。

勝手に引き出しを開けて、いけない事をしてしまった。

慎司の心の中を切り開いて見てしまった感じがした。

(第10話に続く)

## 第10話 一線を引く決心

-. -. -. 彼の奴に渡したくない. . . 独占したい気持ち  
あのイタリアンレストランで、慎司さんがそう言ったのに. . .。

- -. -. 別れたくないな. . . 菜摘に魅かれてきてるし  
こんな事も言いましたよね. . .。

だけど、あの結婚披露パーティーは最悪だった. . .。

1人ポツンと置き去りにされて、慎司さんは昔のフィアンセとテラスに消えて行ってしまった. . .。

そして慎司さんの友人達から冷ややかな目で見られて、酷い嘲罵ちょうまを浴びせられて. . .。

更にその夜の夜の慎司さんの不可解な行動. . .。

あの写真には元フィアンセの理緒さんが写っていた. . .。

よりを戻したくなつたのですか？

私の存在がじやまになりましたか？

今ならまだ大丈夫. . . いい人だなんてちょっと心が揺らいだりもしたけれど、まだ恋は始まってないから。

ほんの少しは心が痛むかもしれないけれど、すぐに忘れられますから. . .。

だから遠慮なく、別れて欲しいって. . . はっきり言って欲しい. . .。

だけどそんなそぶりも見せないで. . .。  
ずるいですよ！両天秤なんて！！

なら、好きにならないように. . . 心を凍らせよう. . .。



慎司さんの間に一線を引こう．．．。

\* \* \* \* \*

最近菜摘は、大きめのトートバッグにスケッチブックと画材道具を入れて、ほぼ毎日一日中出歩いていた。

大手の会社経営者の慎司は、仕事も忙しく帰宅時間も遅かったり時には泊まり込みの日もあったり、あの広い屋敷で固く非の打ち所のないような執事の須藤と、完璧を絵に描いたようなゴツゴツとした厳つい印象の女中頭の西山、真面目一本やりのような女中達と顔を合わせてても、面白くないし、息が詰まりそうだった．．．。だから家に居たくなくて、毎日フラフラ出歩く癖がついてしまった。

普段、大体広い公園や植物園などの自然の中でスケッチしたり、天気の悪い日は、美術館や博物館を見て回って時を過ごした。それ以外には里帰りのように施設に帰って、子供達の面倒を見たり遊んであげたりした。

今日行った事のない新しい公園に行こうと思っていたが、途中で雨に降られて、慌ててすぐ近くのカフェに飛び込んだ。

一歩入ってすぐに気に入ってしまった。

「素敵．．．」

そのカフェの名前は『cafe 銀のスプーン』6階建てのビルの1階部分がカフェスペースで、ちよつと厚手のカントリー調の木のドアを開けると、エントランスにグリーンとガーデン雑貨がさりげなく並んでいて、ちよつとした癒しの空間スペースのようになっており、お客様を温かく迎えてくれるような優しい心遣いの雰囲気が漂って来る。

カントリー調の重厚感のある木のフローリングに、アイボリーの塗り壁、厚手の素朴な木のテーブルと座り心地のいい椅子．．．。素

敵なレースのカフェカーテン．．．。アンティークなレトロなランプ風の照明．．．。

壁面には可愛い飾り棚に、レトロな焼き菓子の型やアンティーク雑貨が飾られてて．．．一段アンティークなレンガタイルで上がったスペースには、クッキングストーブも置かれていた。寒い冬には本当に薪がくべられて暖かな炎の揺らぎを見ながらお茶が楽しめそうだ。

このビルの2階3階が、『ギャラリー月夜の夢』．．．。どうやらこのビルのオーナーであり、画家でもあるご主人がギャラリーを．．．奥さんがカフェを経営してるようだった。

「いらっしゃいませ」

純粹そうな優しそうな奥さんが、キッチンから出て来てオーダーを聞きに来た。

「素敵なカフェですね」

菜摘はキョロキョロ見回して、目を輝かせた。

「ありがとうございます。このお店のインテリアは全て私が考えたのですが、こう言うカントリースタイルのインテリアが私の好みで．．．それを気に入って下さって、とても嬉しく思います」

ほんわりと優しそうな笑顔．．．回りの人皆を温めてくれそうなその笑顔に癒される。

「実はいきなり雨が降って来て、慌ててお店に飛び込んできたのですが、とても素敵なお店で、得した気持ちというのか．．．宝物を見つけた気持ちというのか．．．すごく嬉しくなっていました」  
菜摘もニッコリと微笑む。

「そんなに喜んで下さるなんて！．．．とても嬉しく思います。お

お客様の幸せそうな笑顔を見るのが凄く楽しみなんですよ」

「ここに来ると皆笑顔になりそうな、そんなお店ですよ」

「ありがとうございます。あの．．．もしかして、絵を描かれるのですか？」

チラと、脇に置いたトートバッグからはみ出てるスケッチブックに気がついた奥さんが、興味を持って聞いてきた。

「あ．．．はい。好きで、あちこち出かけては、描いています」

「もし宜しかったら、うちの主人がギャラリーをやっていますので、後で覗いてみませんか？」

「わあ．．．絵を見るのも好きなので、是非、見せていただきますね」

「それからもし良かったら．．．」

そう言つて、一瞬カフェの奥さんがキッチンに消えてから、チラシを持って慌てて戻つて来た。

「毎週水曜日に主人が『クロッキーの会』を開いてまして、参加費タダで、同好会みたいな会なのですが．．．誰でも参加出来ますので、宜しければ参加しませんか？ここに詳細が書いてありますので．

．．．」

「わあ．．．是非．．．参加させて下さい．．．」

チラシの下の方には、お菓子教室のお知らせも書かれていた。

「あ．．．お菓子教室もあるのですか？」

奥さんが顔を少し赤らめて．．．。

「あ．．．はい．．．。こちらは有料なのですが、夕方から同じ水曜日にお菓子教室を開いています。ついでにみたいに宣伝しちゃってすみません。クロッキーの会が終わった後に、参加出来ますよ。あ．．．結構凄く宣伝しちゃってますね」  
含羞みながら苦笑いする奥さんの顔がまた可愛らしいなと思った。年は25、6歳ぐらいだろうか？素敵な人だ．．．。

「お菓子教室も参加したいな．．．」

「是非、検討してみてくださいね！」

「はい．．．」

『cafe 銀のスプーン』のオーナー婦人は、月夜野愛純つきよの ますみさんという人で、26歳だと言う事が分かった。  
ご主人は、パステル画家の月夜野晶つきよの あきいさんで、画家としても活躍してるし、ギャラリーを経営していたり、クロッキーの会をボランティアで開いている．．．。

仲の良い本当に素敵なご夫婦だなと心が温まった。

奥さんの作るお菓子は優しい味で、とても美味しかった．．．。  
今日は久しぶりに素敵な一日だった．．．。

\* \* \* \* \*

家に帰って来たら、珍しく早く慎司が帰って来てた。

「あ．．．おかえりなさい．．．」  
一線を引く事に決めたので、自分でも何となく態度がよそよそしいなど感じる。

「ただいま．．．最近よく出かけるんだね」  
「繁々と、こちらの心の内を読もうとしている様な目で見つめられて、ちよつとドギマギする。」

「はい．．．あの．．．」

「ん？」

最近あまり菜摘の方から声をかけることがなかったので、ちよつと嬉しそうな表情だ。

「毎週水曜日に、クロツキーの会とお菓子教室に参加してもいいですか？」

きょう貰ったチラシを見せた。

「菜摘がやりたいのなら、行っても構わないよ」

「わあ．．．ありがとうございます」

嬉しくてつい飛び上がって喜んだ。

「菜摘の嬉しそうな笑顔を久しぶりに見たよ」

愛おしい優しい視線を向けられて、心がチクリとした。

「あ．．．私．．．着替えてきます．．．」

慌てて二階にかけ上がって、自室に飛び込んだ。

(第11話に続く)

## 第10話 一線を引く決心（後書き）

今回登場した『cafe 銀のスプーン』と『ギャラリー 月夜の夢』、それから月夜野 晶と、愛純……。

あれ……このキャラはもしかしたらとお気付きになられた方もいらっしゃるかも知れませんか……。

そうです……以前発表しました、小説『月夜の夢』の登場人物でした。

元々、フォレストにて『真実の愛』を執筆した時に、月夜野晶というキャラクターにとっても愛着を持ってしまい、『月夜の夢』という小説が誕生しました。この小説をこちらに引越すにあたり、初めの作品とかなり違ってきてしまい、別の作品ではないかと思えるぐらいにかけ離れてきてしまいました。ですので、『月夜の夢』のその後の2人という事で登場させる事に致しました。

## 第11話 あの写真の真相・その1

菜摘は着替えてくると言っただけで自室に飛び込んでから、夕食の時間まで部屋にずっと籠っていることにした。

慎司と特に話す事はないし、顔を合わせるのも気まずい．．．。

心が苦しい時には、あの『幸せノート』が自分を救ってくれる。

ライティングデスクの机の扉を開いて、『幸せノート』を引き出しから出して机の上に置き、何も書いてないページを広げた。

今日あった素敵なカフェの事．．．ギャラリーの素敵な絵．．．クロッキーの会、お菓子教室．．．。

携帯のカメラで映して、帰りにプリントしたカフェの写真と、あのチラシをノートに貼った。

自然と笑がこぼれた．．．。

それからこの間のショッピングで、慎司に買って貰ったミシンの置いてある作業机に座って、来年幼稚園と小学校に上がる、施設の子供達のスモッグや手提げカバン、袋物を縫い始めた。

普通の家庭の子供達はお母さんが縫ってくれたり、めんど臭がりのお母さんは買ったたりもするけれど、施設の子供達には縫ってくれる人も居ない．．．。

手先の器用な菜摘は、実父に引き取られるまで、毎年皆の分を縫ってあげていた。

こうやって1人1人の子の顔を思い浮かべながら、喜ぶ顔を想像しながらミシンを回すのも楽しみだった。

フェルトで、1人1人の名前を切り抜いてパッチワークもしてあげた。

幼稚園にまだあがれない子達には、お出掛け用のリュックサックを今度作ってあげようかななどと妄想しながら、楽しく縫い物をした。

「菜摘はいいお母さんになれるね．．．」

「わっ．．．」

ボソツといきなり背後から声がして、腰を抜かして椅子から転げ落ちた．．．。

「あ．．．ごめん、ごめん．．．驚かせちゃった？」

慎司がカウチソファーに腰かけて、楽しそうに菜摘の事を見ていた。

「し．．．し．．．し．．．慎司さんっ！！何でいつも人の部屋に勝手に入って来るのですかーっ！！」

腰を抜かしたまま、菜摘が驚きすぎて、上ずった声で大声を張り上げた。

「ゴメン、ゴメン．．．いつも怒られているから、今日は何度も念入りにノックしたけど全然応答がなくて、諦めて入ってきちゃったよ」

確かにミシンのモーターの音は結構大きいので、気付かなかったかもしれないが．．．。

にしても．．．全く．．．呆れてしまう．．．。

「なんか．．．この間の結婚披露パーティー以来避けられてるようだから、話しあった方が良くないかなと思ってね．．．。君の部屋にやつて来た．．．」

きまらずそうに苦笑しながら慎司がポツリと言った。



確かに逃げ回っていても仕方ない・・・。

ハッキリさせて、別れるのなら早めに別れた方が、お互いに傷も小さいと思うし・・・。

「分かりました・・・」

「・・・そうだ・・・まずあの写真をこっそり見ちゃった事を謝らないと・・・。」

「あの・・・慎司さんごめんなさい。私悪い事しました」

いきなり謝られたので慎司が物凄く不安な顔をした。

「な・・・なに？好きな人が出来たとか？他の奴とつきあってるとか？」

「そうじゃなくて・・・」

言い辛そうに、慎司の顔を伺うように上目遣いをした。

「な・・・なんなの？」

菜摘の言葉を一言一句聞き漏らさないようにと、全神経を集中させてるそのそぶりに更に菜摘は緊張感が高まる。

「すみません・・・慎司さんの書斎に勝手に入って、引き出しの中の写真を見ちゃいました。」

どうしても気になって誘惑に勝てなくて・・・。「嫌な事は早めに言っつて、罰を受けようと、弾丸のように早口で言った。」

「なんだ・・・そんなことか・・・」

意を決して告白したのに、アッサリと受け流されて、菜摘は物凄く気が抜けてしまった。

「怒らないのですか？」

「俺だつてしよっちゅう勝手に君の部屋に入つてきちゃうし、お互い様だよ．．．」

「慎司さんの部屋が反対側の一番の奥だから、私に近寄られるのが嫌だったり、部屋に入られるのが嫌なのかしらつて思つて．．．きつと凄く怒るだろうなつて思つたのに．．．なんか．．．気が抜けちゃいました．．．」

「俺．．．そんな秘密主義じゃないし．．．全然怒つてないから心配しないですよ。たまたま寝室用と君の部屋用がいい部屋が、ここしかなかつたから遠くに離れてしまつただけだよ。それとも部屋が離れてると淋しいかい？」

そう言つて、意地悪そうな笑を浮かべた．．．。

「う．．．あ．．．いいえ．．．今ので十分です  
うわあ．．．恥ずかしい．．．」

「俺の部屋に入つて来ても全然構わないし、何か使いたい文具があるとかで、引き出しを覗いても怒らないし．．．まあ好きにして．．．いやあ．．．しかし、なんの話しをされるのかと心臓が凍りつきそうになつたよ」

「私も凍りつきました．．．」

「この間、君を置き去りにするような事をして申し訳なかつたよ。理緒にまとわりつかれてちよつと大喧嘩になつてね．．．。写真の事も、話さなくて悪かつたよ．．．。ずっと忘れていた嫌な記憶が蘇ってきてね．．．。」

あの写真の事説明をしたいから、書齋に来てくれるかい？」

「はい・・・」

慎司と一緒に、書齋へと向った。

(第12話に続く)

## 第12話 あの写真の真相・その2

菜摘は慎司の後ろをついて行き、書斎へと入って行った。

あの時はドキドキしながら慌てて引き出しの中の写真を見て、逃げるように部屋から出たのでよく分からなかったが、見回してみると、壁面天井まで作られた本棚には難しい本がずらりと並んで、重厚感ある天然木のダークブラウンの大きな書斎机は、一つ一つ熟練した職人の手作りの一品物という感じで、丁寧に磨き上げ仕上げられ美しい光沢を放ち、高級感と風格が漂っている。その机に合わせた書斎用の椅子は、座り心地のよさそうな革張りで、背もたれも高くひじ掛けのついた豪華な作りで、大企業の社長の玉座という雰囲気か漂っている。

ノートパソコンの横には山積み書類が整然と積まれている。

壁面はアイボリーの塗り壁にダークブラウンの美しい腰壁がぐるりと張り巡らされて、落ち着いた厚手のブラウンの織物のカーテンは美しい房のキータッセルでまとめられていて、気品ある紳士の風格の漂う部屋だなと思った．．．そして、その部屋が慎司にぴたりとマッチする。

ほのかに彼の男らしく女性心をくすぐるようなオーデコロンなのだろうか？いい香りがふわりとした。

子供っぽい自分には似合わない．．．釣り合わない人．．．ふとそんな気持ちになった。

部屋の入り口でぼんやりと立ちつくす菜摘．．．。

「どうした？入って．．．」

「なんか．．．あまりじっくり見た事がなかったですが．．．すごい

く重厚感ある風格のある部屋と云うか．．．この部屋に居る慎司さんって．．．凄く大人の人なんだなって思ってた．．．。改めて、私には釣りあわない人と言うか．．．。慎司さんみたいな人には、理緒さんみたいな華やかで育ちのいい令嬢がお似合いだなんて．．．悟ってしまったって言うか．．．」

「そんな事言うなよ!!」  
叱責されるようなちよつと強い口調で、諫める様な感じに言った。

「だって．．．」

急に慎司がギュツと抱きしめてきて、どうしていいのかわからなくて菜摘は固まってしまった。

「俺は菜摘に魅かれてるって言っただろ？ その気持ちはどんどん大きくなってしまって、もう手放したくなくなってしまった。菜摘が嫌だと言っても、離せなくなってしまった．．．」

「え．．．」

ど．．．ど．．．どうしよう．．．。そんな事．．．。

自分の気持ちを抑えるように、慎司はグツと自分の感情を抑えるように、菜摘からそつと離れた。

「ごめん．．．。でも．．．俺の本心だから．．．覚えておいてね．．．」

「は．．．はい」

心臓が大きく鼓動を打ち始めて、呼吸困難に陥りそうな気分になった。

体も火照ってくる．．．。

慎司は机の引き出しからあの写真をとり出した。

「見て．．．」

真ん中の女性を指さして、

「彼女は俺の婚約者だった人．．．東條理緒とうじょうりお」

やっぱり慎司さんの婚約者だったんだ．．．。

菜摘はちよつとシヨックを受ける。さっきまでの体の火照りが急激に冷めてくる。

「こいつは、俺の腹違いの弟、秀治。秀治は、理緒の事が好きだったんだ．．．。でも叶わぬ恋ってやつ？」

「え？」

「俺の両親はとても仲が良かったんだが、秀治の母親が親父の事をストーカーに近いくらい熱入れててね、ある日酒の席で誘惑して、親父もまんまと罠にかかって、秀治が生まれた。

秀治が親父の本当の子なのかはずっと分からない状態だった。

その後、秀治が亡くなった後、秀治の母がいきなり金の無心に現れてね．．．俺は秀治と親父は親子関係があるのかDNA鑑定に出した．．．。で．．．、親子関係は無かった事が分かった．．．。

葉山家とは全く無関係な人間だったって事なんだ．．．」

「酷い．．．」

驚いて、言葉が出てこない．．．。

「本当だよね．．．」

秀治の母は、秀治を生んですぐに好きな男が出来たらしく、さっさ

と葉山家に秀治を置いて蒸発した。

秀治が実の子かどうか父は酷く疑って、それでも養子として葉山家に迎えたんだ。

俺の母は優しい人だったから、秀治の事を自分の子として育てて、俺と分け隔てなくとても可愛がったんだ……。だが、あいつは妙に僻みやすいやつで……。母と親父はかなり手を焼いていた……。特に親父の方は嫌っていた……。

俺と理緒は、あの頃は心から愛し合っていた。

で、婚約したが、秀治はそれが許せなかったらしく……。

ある日、秀治に呼び出されて、秀治の運転する車に乗ったら、暴走運転して俺と一緒に巻き添えにして死んでやるって、崖からダイブして、で……。こうなった。

秀治の方は即死だった。

おれの足がこうなって、理緒は俺からさっさと去って行ったよ……。

こう言う時に人の本当の心が見えてくるって言うかね……。とても素晴らしい女性に見えてたけれど、理緒の本当の姿を知らなかっただけだったんだって悟ったよ。

俺も若かったし、恋に恋する感じで盲目になっていたんだと思う……。

足を失ってから暫くは、崖からダイブするあの恐怖が蘇ってきてね……。とても苦しかったよ……。

やっと立ち直ったと思ったら、結婚披露パーティーに理緒が現れて……。あの日は久しぶりにまた、辛い記憶が蘇ってしまってたね。寝つかねなくて、弱い自分を戒める気持ちで、この写真をあえて見に、この部屋に居たってわけ……。

余計な事を言つて、君を傷つけたりするのも嫌だったし、君に嫌われてしまうのも恐かったし．．．黙っていたんだ」

「そううだったのですか．．．。理緒さんの事、もう未練はないのですか？」

「足がこうなつた途端、いなくなつたんだよ。もう愛情も消えたよ．．．」

「私．．．あの日ずっと戻つて来なかつたから、私と別れて理緒さんとよりを戻し無くなつたのじゃないかって思い込んで．．．今だつたらお互いに傷もそれ程深くない状態で別れられるだろうって思つて．．．」

慎司さんの事、好きにならないように心を凍らせて、一線を引こつて決心して、わざと避けてました．．．」

「そんな．．．酷いじゃないか．．．」

俺はそんなにアツサリ別れられないよ．．．俺はもう．．．菜摘の事を愛し始めてるんだ．．．」

菜摘の決心を聞いて、物凄くショックを受けた慎司だった。

「ええーっ」

その衝撃的な言葉にタジタジと後ずさりしてしまった。

「その反応だと、菜摘はそこまで到ってないって事だね．．．」  
落ち込む慎司。

「私．．．本当に自分の気持ちが変わらなくて．．．でも．．．時々心が揺らぐつて言うか．．．理緒さんと慎司さんがテラスに消えて行つた時には心がチクンと痛くなりました」



「本当？」

菜摘が心の内を打ち明けたら、また慎司がふんわりと抱きしめてきた。

「それは多分恋の始まりだと思うな．．．気にもとめてない人だったら心が痛まないし．．．ちょっと希望が湧いて来たな．．．」

「こ．．．恋の始まり？」

「ちょっと衝撃が走った．．．」

「私が慎司さんに恋してるの？」

「そう．．．」

熱っぽい目で見つめられて、ちょっと腰が抜けそうな気持ちの菜摘だった．．．。

（第13話に続く）

### 第13話 光希園・その1

慎司は、菜摘が15歳まで暮らしていた施設がどのような所なのか？一度ぜひ見に行ってみたいとずっと思っていた。

菜摘にその事を話したら、「じゃあ今度の休日にでもいきませんか？」と快く受けてくれた。

今日はその日、これから一緒に施設に出かける所だ。

菜摘は子供達の為に作ったスモッグやバッグなどを、大きな箱に沢山入れて、車の荷物入れの所に詰め込んでいる。

愛情込めて作った手作りの品は、1人1人可愛らしくラッピングされて、手書きのカードも付いている……。

慎司は内心俺もひとつ欲しいものだ……と思った。

小っちゃな子に焼きもちを焼くなんて！！と思いつつながら、子供達がうらやましい気持ちだ……。

73

「慎司さんみたいなセレブな人には、施設とか驚きの場所ですよね？でも……私、施設で育った事、恥ずかしいって思っていないし、私の実家みたいな気持ちなんです。リラ先生は私のもう1人のお母さんだっと思ってるし……」

菜摘が助手席に乗り込んでシートベルトを締めて、話しはじめた。

「リラ先生？」

運転席に座っている慎司も、シートベルトを締めた。

「光希園……あ、施設の名前が光希園こうきえんって言うのですが、その園長先生なんです。」

園長先生は日本に帰化したカナダ人なんですよ！マリラ・アンジエリカ・河本って言う名前カワノで、ファーストネームがマリラだから、

リラ先生．．．。

お亡くなりになったリラ先生の旦那様の名前が、光希だったから、光希園って言うんです。

英語教師として日本にやって来て、リラ先生が教えていた学園の学園長だったのがご主人で、熱烈な恋愛結婚だったそうですよ。親子ぐらい年の離れたご夫婦だったから、ご主人は早くに亡くなられてしまったのですが．．．。

リラ先生のご主人がこの園の創設者なのですが、ご主人が亡くなられた後に『光希園』って改名したんです」

「そうなんだ．．．じゃあ、私設の児童養護施設なんだね」

「はい．．．。寄付で成り立ってるような園なのですが、幸いにも沢山の温かい善意を頂いて、質素な暮らしでしたが、一般家庭と大差ない生活ぶりでしたよ。

いえ．．．それ以上かな？ 一般家庭の子供達って塾に行ってますよね？ 私達は、ボランティアの大学生や、教師とか、教授とか．．．その専門分野の人達がいつも勉強を見て下さって．．．それがとても面白い授業で．．．こう言っちゃうと悪いのですが、学校よりも分かり易くて授業が面白くて．．．皆、勉強が好きになって出来てましたし．．．。

英語はリラ先生が教えて下さって．．．。ピアノや歌も習ってましたよ。歌の先生は現役のオペラ歌手だったり．．．ピアノのアルフオンス先生はドイツ人で音大のピアノ科の教授ですし．．．。絵も習ってましたし．．．。そうやって考えると、素晴らしい方々に本当に支えていただいて今の私があるっていう感じです．．．。」

目をキラキラ輝かせて話す菜摘を見て、幸せだったんだなと慎司は思った。

「へえ．．．なんだかちよっと安心した気持ちだ．．．施設では幸

せな暮らしをしてだったんだね」

「はい．．．辛かったのは、実父に引き取られた3年間と．．．」  
「サツと顔色が曇って、とても辛い暮らしぶりだったのだという事が  
伝わってきた。」

「と．．．?」

「結婚式までかな?」

チヲと慎司の顔を伺う菜摘のその様子に、チクリと心が痛んだ。

「今も辛い?」

ちよつと恐る恐る尋ねる．．．。

「今は楽しいです」

菜摘の顔が笑顔に戻ったので、慎司はホツとした。

「良かった．．．」

「あ．．．これを．．．」

そう言つて、さっきからずっと大切そうに手に抱えてた、綺麗な包装紙でラッピングしたA4サイズぐらいの包みを慎司に渡した。

「俺に?」

「はい．．．」

「見ていい?」

心臓がドキドキと高鳴って、嬉しくてたまらない。

「どうぞ．．．」

丁寧に包みを開けて中から出てきた物は、手作りのカジュアルシャツだった．．．。

サラリとしたオーガニックコットンの草木染めの、優しい色合いのチエツクのシャツ．．．。

菜摘の優しさがひしひしと伝わってくる．．．。

「うわぁー。凄く感動したよ．．．どうもありがとう．．．」

「いつも親切にして下さる慎司さんに感謝の気持ちを込めて．．．愛を込めてとか、好きですなんて書いてあったらもつと感激ものだが．．．彼女の精一杯の今の気持ちだろう．．．。ゆっくりといい関係を育んで、愛を育てていけたらそれでいい．．．慎司はそう思った。」

「喜んでいただけで、嬉しいです。実は夜、枕の下にメジャーを忍ばせて．．．背を向けて寝ている慎司さんを探寸して作りました．．．。結構熟睡してるのですね？ 手を持ち上げて測っても全然起きませんでしたよ」

その時の様子を思い出しながら、いたずらっ子の顔をしてクスリと思い出し笑う菜摘。

「ガーン！菜摘は夜中にそんな事してたの？」

「はい．．．。時々夜中に起き出して、シャツ縫ってたり．．．。だって慎司さんってすぐ人の部屋に勝手に入って来るから．．．シヤツを縫ってるのがばれちゃうし．．．。『鬼の居ぬ間に洗濯』と『鬼も寝る間』ってことわざもありますし．．．」

「じらっー」

菜摘のおでこを軽くデコピンした。

「あいたっ！ あははは．．．」

「ちえっ．．．俺は鬼かーっ！！」

「鬼だーっ！！」

「まったく．．．さあ行くぞ．．．」

2人で笑いながら、慎司はエンジンをかけて車を発進させた。

(第14話に続く)

## 第14話 光希園・その2

光希園は、東京の外れ、緑に囲まれた狭山丘陵の近くにあり、側には東京都民の水瓶、大きな人工湖の多摩湖もあり、自然豊かな素晴らしい所にあつた。

慎司の車は、『光希園』と書かれたプレートをついた手作り風のレングの門を通り抜け、土を均して固めただけの10台ほどの駐車スペースの端の方に車を駐車した。

園は木の斜め格子のラティスフェンスでグルリと囲われて、コニフアーと色とりどりのハーブや素朴な花々が綺麗に植えられて、風にゆらゆらと揺れている。

可愛らしいガーデンアーチの入り口をくぐって入ると、建物の玄関まで枕木のアプローチが続く。

光希園の建物は、風見鶏のついた赤い屋根瓦に、レトロな妻飾りのついた、昭和初期の洋館という雰囲気漂わせてる。

外壁は白いラップサイディングで、白い格子の入ったダブルハングウィンドウ（上げ下げ窓）には飾り鎧戸がついていて、玄関張り出し屋根を支える柱は、その年代を感じさせる美しいコラムポスト（装飾柱）が支えている。

扉上部には、アールヌーボなステンドグラスが入っている。とても味わいのあるノスタルジックな2階建ての洋館で、元は学園の旧校舎だったものを、改装、手直しして使っているものだ。

「リラ先生、ただいま。菜摘です」

玄関先で菜摘が大声で呼びかけたら、奥の方から中年の女性の声が出た。

「はい。なっちゃん、おかえりなさい」

淡いブルーの花柄のエプロンをつけ、茶色がかった金髪を後ろにふんわりとアップにまとめ、淡いブラウンの瞳の、50歳半ばの美しい女性が小走りで玄関にやって来た。

「あら．．．こちらが慎司さんね。はじめまして、良く来て下さいましたね」

ほんの少し英語訛りの日本語で、優しい笑顔で慎司を歓迎してくれた。

「はじめまして、今日は菜摘の育った家を是非見てみたいと思いまして、伺わせていただきました」

「なっちゃんからいつも話しを聞いてますよ。ウチの娘をこれからもよろしくお願いしますね。さあ、あがって下さいね」

「はい、おじゃまします」

今、園には0歳児が1人、2歳児が2人、来年幼稚園にあがる3歳児が3人、来年小学校にあがる幼稚園児が2人、小学生が4人、中学3人、高校生2人の合計17名の子供達が生活している。

園長先生以外に先生は6人、先生の中には園出身の人も2名いる。

慎司は菜摘に案内されて、園の中を一通り見学させてもらった。

乳幼児部屋には可愛いベビーベッドと子供ベッドが置かれていて、窓ガラスには楽しそうな動物や果物などのガラスシートが色々貼られている。すぐ近くにはプレイスペースもあり、先生と一緒に幼児が楽しそうに遊んでいた。

幼稚園児は、大部屋の左右、男女に分けて柵のついたベッドが並んでいて、自分用のカラフルな色の扉のロッカーが並んでいる。天井



からは楽しそうなモバイルが色々下がっていて、風にゆらゆらと揺れている。

隣の部屋はプレイルームになっていて、大きなテーブルでお絵描きしたり、おもちゃで遊ぶ事が出来るが、天気の良い日は皆、外で遊ぶのが大好きなので、今日みたいな天気の良い日は誰もいない。

小学生以上は1人ずつロフトベッドで、上段がベッドスペース、その下が学習机と本棚に物入れ、それ以外に1人ずつ部屋にクローゼットがついている。

小学生は男女別で4人部屋、中学生は男女別で2人部屋、高校生は個室・・・。

各部屋にユニットバスとトイレ、洗面台がついている。掃除用具置き場もあるので、各部屋の子供達が責任を持って自分の部屋の掃除をするようだ。

外に出たら、大きな子も、小さな子も、みんな混ざって、楽しげに遊んでいた。

1人の子が菜摘に気がつき、皆も次々と気がつき元気いっぱいこちらに向って走って来た。

「なつちゃんだー!!」「なつちゃん」「なつちゃん」

「ねえ、このおじちゃんは大あれ?」

1人の子が慎司に興味を持ち、皆、次々と興味津々の顔で見つめる。皆、大きな澄んだ瞳が愛らしい・・・。

「このおじちゃんは・・・なつちゃんの旦那さん」

菜摘が少し恥ずかしそうな顔をして、ぼそつと言った。

「なつちゃんもう結婚しちゃったの?」

小学校低学年の女の子がキョトンとした顔をしている。

「赤ちゃんいる?」

幼稚園の女の子が菜摘のお腹に耳を当ててる。

純真無垢な子供は、結婚したら赤ちゃんがすぐお腹にやってくると思ひ込むことがある。

勿論コウノトリさんが運んできてくれると思ってるが．．．。ちよつと菜摘がタジツとなる．．．。

「うんまだお姉ちゃんのお腹は空っぽだよ。お姉ちゃんまだ若いし、まだお母さんにはなれませんって、コウノトリさんは配達に來ないから．．．」

赤ちゃんと言つ言葉に慎司もドキツとする．．．。本心は早く本当の夫婦になつて、欲しいものだと思つて居るのだが．．．。

「ねえ．．．なつちゃんは若いけど、このおじちゃんは年取つてるよー」

幼稚園の男の子が慎司を指差して、菜摘に言った。

今度は慎司がタジツとなる．．．。

「そう言つて年差カップルっていうんじゃねえか？」

小学校高学年の男の子が、ニヤリとイタズラそうに笑つて言った。

「こらっ！ 隆文は小つちやな子に余計な事言つんじやないからねー！！」

菜摘が照れながら、一生懸命怒つて居る姿を、慎司は面白そうに見つめていた。

「おじさーん、サッカーやろうよー！！」

小学生の男の子達が慎司と遊びたがってウズウズしている．．．。

「おじちゃんね、足を怪我してるからちよつとサッカーは出来ないんだ．．．」  
慎司が優しく言った。

「じゃあトランプは？」

「それなら得意だよ！！」

「わーい！！じゃあ皆でおじさんとトランプやるうぜー！！」

「なつちゃんも早くいこう！！」

ワイワイと皆で、テラスの大きな丸太の木のテーブルに慎司を連れ行つて、トランプ大会が始まつた。

広いウッドデッキのテラスは、カーボンの大きな屋根がついていて、その上には大きな木が茂つていて、その木がいい日除けになって、暑い季節には格好の遊び場所だ．．．。

部活から戻つて来た、中学生や高校生達も混ざつて、大トランプ大会が始まつた．．．。

勝負事には熱くなるタイプのようで、少年の顔をのぞかせる慎司の姿を見て菜摘は微笑んだ。

あの書斎にいる時の慎司は、自分とは遙遠くかけ離れた大人の人と言つ感じがしたが、ここにいる慎司はとても身近な存在に感じる。

大トランプ大会が終つた頃合いを見計らつて、リラ先生達が手焼きの焼き菓子とアイスハーブティーやフレッシュジュースを持って来てくれた。

お茶の後、子供達は園内の動物達の世話や、畑に晩ご飯の野菜をとりに行つたり、それぞれの役割分担をしにいつて、リラ先生と菜摘と慎司3人となり、リラ先生から、菜摘の小さな頃の話など伺つた。

(第15話に続く)

## 第14話 光希園・その2（後書き）

話しがゆっくりペースの進行ですが、お付き合い下さると嬉しく思います。

## 第15話 光希園・その3（菜摘の生い立ち）

リラ先生が、表紙に『なつちゃんのアльバム』と書かれた厚手のアルバムを持って来て、はじめのページを開いて慎司に見せた。そこには新生児の時の、小つちやな愛くるしい菜摘が沢山写っていた。

「なつちゃんがここに来た時は、まだ生後2週間目だったんですよ。。。

なつちゃんのお母さんが、出産後すぐに亡くなってしまっただけ。。。。暫くは病院に預けてたらしいですが、病院の方だっただけ。。。。長くは置いておけないから引き取ってくれと父親に言いました、その父親は引き取るとすぐに、当時瀬川家の使用人をしてたある夫婦に無理矢理という感じで預けて。。。。その夫婦もそんなに悪い人達ではなかったんですよ。

でも、自分達にも子供が3人もいるし、貰っているお給料は安くてもともう1人は育てられないと、困り果てて。。。。色々調べたらしく、うちに預けるのが一番、なつちゃんにとって幸せだろうと思っただけここに連れて来ました。

沢山の子供達を育ててここから巣立たせてきましたけど、生後2週間なんて。。。。こんなに小さな子を育てるのは私も初めてで。。。。最初は戸惑いました。新米ママと同じ様に色々失敗もありましたしね。

でも、そんなに小さな頃から大事に育てて来ましたから、私には子供はいませんが、お腹を痛めて生んだ我が子の様に思ってるんですよ。

名前もね。。。。私がつけたんですよ。

日本の万葉集に『菜摘』って言う言葉が出て来るそうで、『natumi』と言うその言葉の響きが好きで。。。。。

菜の花も可愛らしくて好きですし．．．。穏やかでつましくて、可愛らしい日本女性のイメージが浮かんできて．．．。で、名前と同じで、こんなに可愛い子に育ちましたねー」

リラ先生が菜摘を抱きしめて頬擦りした。そう言う時の菜摘は、甘えん坊の子供の顔をしている。

慎司がゆっくりページをめくってアルバムの写真一つ一つをじっくりと、愛おしげに嬉しそうに見た。

アルバムの菜摘は、どれもキラキラと輝いて笑っていた。

沢山写っている写真は、高校入学の写真を最後に急激に少なくなっていた。

「鳳花芸術高校．．．ここに入学したんだね。こう言う関係に進みたかったの？」

高校入学の笑顔の写真を見てから、慎司が菜摘の顔をチラと見た。

「ええ．．．」

返事の声が力無く．．．ちょっと泣きそうな淋しそうな表情の菜摘に、慎司はドキリとした。

「私．．．絵を描くのが大好きで、絵本の挿し絵とかイラストとかそう言う仕事がしたくて．．．一生懸命頑張って念願の芸術高校に入ったら、あの人が突然やって来て．．．」

菜摘の悲しい気持ちを察して、リラ先生が菜摘を抱きしめて、慰める様に頭を優しく撫でた。

「なつちゃんの夢だったのよね．．．私もなつちゃんを取られまいと一生懸命抵抗したけれど、日本の法律は実の親に甘いですね。なつちゃんを私の籍に入れておけば良かったと．．．本当に後悔しました。悔やんでも悔やみきれない気持ちですね。それに優しい子だ

から、私に迷惑をかけまいとして．．．自分から瀬川の家に行くと言い出して．．．本当に可哀想な事しました」

引き取られた後も時々園に戻って来てたようだが、写真の菜摘は、笑った顔も何処か曇っていて、見るからに痛々しい感じだった。この辺りから心を凍らせる事を覚えてしまったのだろうか？幸せノートもこの頃から書きはじめたのだろうか？

「瀬川の奥さん（菜摘の継母）は鬼ね．．．時々なっちゃん、顔を腫らしてふらりと園にやって来てね．．．でも、心配かけまいと私に話してくれなくて．．．とても心が痛かったです．．．。誘拐してでも、ここに連れ戻したい気持ちだったです。

何時でもうちに来なさいって、ここはあなたの家だからねっていつもなっちゃんに言っていましたね！。

私の知らない間に政略結婚まで．．．突然なっちゃんがやって来て、「結婚しました」って言った時にはもう心臓止まりそうになりましたよ」

その事は慎司も申し訳なくて、恐縮してしまう気持ちだった。

あの時誠実な態度をとって、間違いを犯さなくて本当に良かったと慎司は内心想った。

「その事は私も本当に申し訳ない事をしました」

「でも．．．あなた達まだ夫婦ではありませんね？」

菜摘も慎司もその言葉にはドキリとした。

「リラ先生何で分かるの？」

非常に驚いた顔の菜摘。

「私はなっちゃんのお母さんですよ．．．私はそう思ってるし、娘



の事は何でも分かりますよ。菜摘はまだ結婚するには若すぎると思  
ってますし、間違いが起きなくて良かったと思ってます。慎司さん  
も誠実な方で、感謝してます。

いつか2人の気持ちが固まった時、自然とそう言う形になっている  
だろうなと思ってますよ。

慎司さん、この子はまだまだ子供ですし、心がもう少し成長するま  
で急がずに待つてあげてやってくださいな。

そのうちなっちゃんはあなたの事、好きになって愛するようになる  
と思いますよ」

「リラ先生〜!!!」

菜摘は真っ赤になって恥ずかしかった。

そんな菜摘を愛おしそくに、マリラ園長は母親の顔で見つめて微笑  
んだ。

「はい．．．。リラ先生にご心配おかけしないように、菜摘の事大  
切にしようと思います」

「慎司さん、ありがとう．．．これからもなっちゃんの事、よろし  
くお願いしますね」

\* \* \* \* \*

「なあ．．．美大受けてみるか？」

帰りの車の中で、突然慎司は呟くように言った。

「えっ？」

突然の思いも寄らない話しに、菜摘はとても驚いた。

「絵の道に進みたかったんだろ？」

「でも・・・」

「菜摘は若いし、今から頑張っても十分間に合うと思うよ。難易度の高い芸術高校だって入学できたじゃないか・・・」

「いいのですか？」

「いいよ・・・菜摘の夢叶えるよ」

日も暮れて、車内の慎司の顔ははつきりは分らないが、優しく微笑んでいるように見えた。

「ありがとうございます」

菜摘もキラキラの笑顔で笑った。

「ようし！明日からビビシと勉強しごいてやるからな！..」

「ええーっ！..」

「心を鬼にして、菜摘をしごくぞ！..」

「や・・・やっぱり慎司さんは鬼だわー」

「ようし！..明日から楽しみだ！..」

「こ・・・こわいなあー」

少ししてから慎司をジッと見つめながら、菜摘が含羞みながら言った。

「でも・・・ありがとうございます。私・・・今、幸せです」

「もつともつと幸せになろうな」  
運転で目は前方を見ているが、慎司がにっこり笑った。  
あの結婚式の時、冷やかな目をして氷の仮面をかぶった夫はそこにはいない．．．これが素の慎司さんなんだ．．．。

「はい．．．」  
リラ先生の言ったように、私．．．慎司さんの事好きになっちゃいそう．．．。菜摘はふとそう思った。

今日の園での事もとても楽しかった．．．子供達もみんな慎司さんに懐いて．．．将来、優しいお父さんになりそう．．．。  
慎司は、園にも多額の寄付をしてくれ．．．いつの間にも用意していたのか、子供達に素晴らしい沢山の絵本や本、学用品もプレゼントしてくれた．．．。  
園の建物の傷んでいる箇所も、すぐに職人をよこして修繕してくれるように手配してくれた．．．。

．．．．．おかあさん、私．．．幸せ見つけたみたい．．．。お母さんにいっぱい笑顔を見せてあげられそう．．．。  
菜摘は心の中で、写真でしか会えない母にそう呟いた。

(第16話に続く)

## 第16話 とある一日

菜摘の夢の実現の後押しに、慎司も最大限の協力をしてあげたいと、優秀な家庭教師を沢山つけてくれて、菜摘は毎日猛勉強を始めた。勉強部屋はあの慎司の書斎を貸してくれると言われたが、あの男性的な重厚な部屋の圧迫感に押しつぶされそうな気持ちで、菜摘にとつては妙に落ち着かない……。

結局、慎司にとっては気になる部屋ではあるが、菜摘と慎司の部屋の間にある、あの忌まわしい事故で亡くなった秀治の使っていた部屋を、菜摘の勉強部屋兼アトリエとして使わせる事にした。この部屋が秀治の部屋だった事は菜摘には言っていない……。

あの事故の事で慎司は秀治に対して、深い厭悪えんおの感情を抱いてしまい、殆ど秀治の私物は処分してしまったが、ほんの僅かだけクロゼットのの中に残っていた。

それは……秀治が描いた数点の油絵だった……。屋敷と庭の絵や、慎司の母……それから慎司や理緒の肖像画もあった……。

絵の色調やタッチを見ると、感性が豊かで穏やかそうな性質が感じられて、そんな大胆な事をしそうな様には見えなかいが……。人の心は複雑で分らないものだ……。

部屋内装は全部リフォームして、壁紙カーテン照明……すべて菜摘の好きな物に替えられた。

元は男性的だった部屋が、英国製の柔らかな色調の花柄の壁紙……。アンの部屋のような柔らかなグリーンのカーテン……。可愛いレースのカフェカーテン……。

白のヨーロピアンアンティーク調の優雅な机……それに合わせた、

ブックシェルフ・アンティーク飾り棚、可愛らしい壁掛け飾り棚・

完成した部屋を見て慎司はかなり怯んだ……。  
まるつきり若い女の子の夢見る部屋と言っか……。これは……。赤  
毛のアンの世界だ……。  
そして年の差を感じた……。  
三つ編みをして机に向って勉強している後ろ姿は、少女と言う感じ  
で……。

もう間もなく19歳になるとは言っても、まだ18歳の女の子なん  
だ……。

ま……。まさか……。あの俺の書齋が……。『この部屋オヤジ臭い  
って感じい』とか、思われてないだろうな……。  
つまらない事を想像するとかかなり凹む……。

「あ……。慎司さんおかえりなさい!! こんなに素敵なお部屋に  
して下さって、ありがとうございます」

クルリとふり返った菜摘の笑顔にホッとする……。

この部屋が、彼女のお陰でまるつきり違う部屋として生まれ変わっ  
て、良かったんだ……。

ふとそう思った……。

秀治の幻影もこれで消えてくれる……。俺も苦しみから少しだけ  
開放される……。

「とつても気に入ったみたいで良かったよ!」

「もうとても……。この部屋に入ると嬉しくて……。こんな世界  
に憧れていたから……。あ……。子供っぽい趣味しててごめんな  
れ。」

「そんなの気にしなくていいよ、逆に、オヤジっぽく思われてないか心配になってきた・・・」

「そんな事ありませんよ！素敵な大人の人が感じて・・・憧れると言うか・・・なんていうか・・・」

菜摘がちよつと頬を赤らめて、照れ隠しに目を反らした。

「あ・・・べ・・・勉強教えて下さいよ・・・ここが分からなくて・・・」

「どれどれ・・・」

慎司はわざと後ろから覆いかぶさるように、菜摘の頬と接近するぐらい顔を近づけて、何も感じてない表情をしながら勉強を教えた。

「なにになに・・・RⅡ×7のときに・・・」

耳まで真っ赤になって照れて、一生懸命固まって耐えてる菜摘の様子が可笑しく可愛らしい・・・。

このまま菜摘のほっぺにそつと口づけしちゃうかな・・・そう思っていたら、ポケットに入れていた携帯が鳴り出した・・・。

(チエツ・・・誰だ！こんな時に電話してくる奴は・・・)

「黒沢からか・・・」

(このタイミングの悪さは黒沢らしいな・・・)

「もしもし・・・」

自然と不機嫌な声になる。

「あ・・・慎司？」

慎司の不機嫌な声に、会議中とか仕事の立込んでる時に電話かけちゃったかと、怯みがちに遠慮がちに喋る黒沢。

「忙しい時に悪い・・・」

「なんだよ・・・」

「え？ レストランオープン記念パーティー？ かみさんも一緒に？ その日のスケジュールは空いてるけど．．．ちよっと待って！」

「菜摘．．．今度の休日何か予定ある？」

黒沢の時とは違って、優しい声に早変わりする慎司。

電話口の黒沢は．．．。

(なんだよ．．．あの奥さんとイチャついている最中だったわけね．．．)

心の中で『チツ！』と舌を鳴らす．．．。

「あ．．．いいえ予定ありませんが．．．」

「黒沢のレストランのオープン記念パーティーに夫婦で参加して欲しいって言う電話なんだが、大丈夫かな？」  
申し訳なさそうな表情の慎司。

「あ．．．大丈夫ですよ．．．」

内心、黒沢は苦手な人だったが、慎司の幼なじみだ．．．。行きたくないなんて子供みたいな事言えないし．．．。  
内心渋々という感じにだったが、愛想笑いをして返事をした。

「大丈夫だ！！ ああ．．．かみさんも大丈夫だって．．．。うん、ああ、わかった．．．じゃあな」

最後まで不機嫌な声の慎司．．．。

「もう．．．折角の所じゃましやがって．．．」

「え？」

その慎司の独り言にキョトンとした顔で慎司を見る菜摘・・・。

「ああ・・・なんでもない。折角勉強を教えている所にじゃまが入ったから・・・全く・・・。」

「そうだ・・・まだ時間があるし、食事とショッピングに行こう・・・。」

「ええっ?」

「たまには生き抜きしないとね・・・それに・・・パーティーのドレス買いに行かないと・・・。」

黒沢のレストランのパーティーと言えば、学友も多くやって来る・・・若くてかわいい奥さんである菜摘を、美しく着飾らせて自慢したくてウズウズ状態だった・・・。

「だって・・・着る物は沢山ありますよ!!!」

「あーダメダメ・・・。あれはフォーマルすぎる・・・黒沢のパーティーはもう少しカジュアルだから・・・それに見合った服じゃないとね・・・。」

「そ・・・そうですか・・・。」

「さ・・・早く行こう・・・。そのままの格好でいいから・・・。」

「ええーっ・・・。こんな三つ編みのお下げで!!!」

「いいから、いいから・・・。」

店が閉店する前にいかないと焦りまくってる慎司だった・・・。



(第17話に続く)

第16話 とある一日 (後書き)

次回は一波乱の幕開けです・・・。(････)

## 第17話 陰惨なパーティー会場・その1

「慎司さん、おかしくありませんか？」

自家用リムジンに乗り込んでから、不安げに慎司に聞いた。

「凄く綺麗だよ．．．」

慎司は、本当に見惚れてしまいうぐらい凄く可愛いなと思った。

今日の菜摘は、淡いアイボリーベージュのシフォン生地ワンピースで、フェミニンな印象のウェストのサテンリボンが愛らしい．．．

スカートはバルーンになってて、裾にはエレガントな雰囲気の2段になったフリル．．．。

肩ひもタイプのワンピースで、その上に小さな薔薇のモチーフを集めたようなボレロを羽織っている。

シオルダーチエーンタイプのクラッチバッグは、ワンピースとおそろいの生地で、たつぷりのギャザーに中央にシフォン生地をロール巻きしたような薔薇のコサージュがついている。

アクセサリーはシンプルに胸元に大粒の一粒の真珠のペンダントネックレス。

ヘアはサイドに作ったお団子にお揃いの色のコームのコサージュを挿したシンプルヘア。

菜摘の若々しく清純なイメージをより引き立ててくれる装いだ．．．

リムジンは、新しくオープンする黒沢のイタリアンレストラン、エントランス前の車寄せで停車し、2人はそこで降りてパーティー会場入りした。

入り口には黒沢とシェフがいて、招待客1人1人に挨拶していた。

「やあ、慎司．．．今日は来てくれてありがとうな。ゆっくりして  
いってよ．．．奥さんも楽しんでいってね．．．」

「オープンおめでとう．．．今日は招待してくれてありがとうな」

「オープンおめでとうございます。あの．．．これお祝いに．．．  
ちよっとした物ですが．．．よろしければ．．．」

菜摘がアレンジフラワーを手渡した。

それはハートの形をした、薔薇とツル性のグリーンで作った素敵な  
アレンジフラワーだった。

「え．．．これ可愛いね．．．どうもありがとうございます」  
いつもはアクの強い話し方の黒沢だが、とても嬉しそうな笑顔を見  
せた。

「かみさんの手作りだからね!」  
慎司が鼻高々で自慢した。

「えーっ!!奥さんの手作り?」  
これには凄く驚いたという顔をした。

「うちのかみさん手先が器用だから．．．俺のシャツも縫ってくれ  
るし．．．」

「へえ．．．凄いね。なんか羨ましいな．．．」  
黒沢が羨ましそうな顔で慎司と菜摘を代る代る見た。

「あ．．．混んできたね。じゃあいくわ．．．またあとでな．．．」

「

招待客がどんどん会場入りするのに気付き、慎司が黒沢に手をヒョイと上を上げて合図を送ってから、菜摘をエスコートして会場に入って行った。

「またな．．．ゆっくりしていけよ」

黒沢はあの事故以来、昔のような明るさを失い何処か冷ややかさのような陰りのあった慎司が、最近明るく変わったなと感じた。

「あいつ、幸せなんだな．．．」

この間の結婚パーティーでの言動はちよつと申し訳なかったなと心が痛んだ。

\* \* \* \* \*

会場に入ると、菜摘はすぐに鋭い視線を感じた。理緒さんだ．．．。理緒も、幼稚舎からの仲間．．．。多分来ているだろうなとは思っていたが．．．。実際に顔を合わせるとやはり息苦しい物を感じる。

慎司も理緒が会場にいる事をすぐに感じ、わざと離れた席に菜摘を誘導して、そちらの方に向った。

端の方に行っても、幼稚舎の仲間が慎司をすぐに見つけ自然と集まってくる。

慎司は昔から皆の人気者だったのだなと菜摘は思った．．．。

義足に慣れているとは言っても、人込みの中長時間立っているのは慎司には辛い物がある．．．。

イタリアンビュッフェスタイルのパーティーなので、慎司を席に先に座らせて、菜摘がお料理や飲み物を取りに行った。

「わあ．．．美味しそう．．．」

物凄い種類のおいしそうな料理に目移りしてしまう．．．。

色々な種類のお料理を少しづつ持って行こうと思ひ、可愛らしい小皿に乗ってる生牡蛎のレモン添えを手にとろうとした時だった．．．

。「慎司は生牡蠣は苦手よ」

声のする方を見たら、理緒さんだった……。こんな近くに近くで理緒さんを見るのは初めてだったが、凜とした華のある綺麗な人だと思った……。幼稚園から高校までこの人とずっと同じ時間を歩いてきたのね……。いいえ……。5年前までずっと？

あの事故がなかったら、この人が今頃慎司さんの奥さんとして隣に立っていたのね。

きつと可愛い子供もいたでしょうね……。  
凄く複雑な気持ちだ……。

「そ……。そうですか」

なんて言っつていいのか分らずに固まってしまった。

「あなたみたいいな貧相な子が、私達の中でも飛び抜けて一流な慎司の奥さんだなんて……。私、納得が行かないわ」

気の強そうな人だと思ったが、キツと睨まれるとゾクツとするぐらいの冷やややかさがある。

「納得いかないって言われましても……」

暫くギツとした目で睨まれて、菜摘はその場で硬直してしまった。

その時悪知恵が浮かんだようにニヤリとして、黒沢の所にいったしまった。何やらボソボソと耳打ちしている姿が見える。

今のうちにと菜摘は慌てて料理を乗せたプレートを持って、慎司のいる席に戻って、プレートをテーブルに置いた。

慎司は品のよさそうな同年齢ぐらいの男性と楽しそうに歓談していた。

「あ……。どうもありがとう……。」

慎司は菜摘に一声お礼を言ってから、その男性に菜摘を紹介した。

「彼女が俺のかみさんの菜摘」

「どうも初めまして．．．倉本と申します。慎司とは高校からの友人なんです．．．」

「あ．．．どうも初めまして．．．」

「いやあ素敵な奥さんじゃないか．．．慎司良かったな！」

高校からの友人という倉本と言う人は、幼稚舎からのエリート意識の高い仲間とは少し異質な雰囲気の穏やかそうな人だった。

．．．その時だった．．．。

グランドピアノの置かれている、中央ステージで理緒がマイクを持って司会を始めた。

「どうも初めまして．．．この度はイタリアンレストラン『リスランテ・クロサワ』広尾店オープン、おめでとうございます。

私はこのレストランオーナーである黒沢氏とは、幼稚舎からの友人であります、東條理緒と申します。

ささやかですが、レストランオープンを祝しまして、友人一同からお祝いのミニコンサートを贈らせて頂きたいと思えます。

手始めに．．．黒沢氏と無二の親友でもあります、葉山氏の可愛い奥様のピアノをご堪能下さい．．．」

「え？」

私の事？菜摘は仰天した．．．。

会場から割れるような拍手が起きる．．．。

慎司が激しい怒りの顔をした。

「菜摘いいから．．．俺が一言言ってやるから．．．」

菜摘にスポットライトが当り、会場の人達は一斉に菜摘に注目して拍手が鳴り響いていた・・・。

(第18話に続く)



第17話 陰惨なパーティー会場・その1（後書き）

こんなに長い連載物を書くのは初めてです．．．。  
元々のベースの作品『真実の愛』とはすっかり別の作品の様になっ  
て来ました。

これから色々な事が巻き起こりそうな予感がします．．．。（頭の  
中にはストーリーが出来上がってますが．．．）  
読者様に楽しんでいただけたら幸いです。

## 第18話 陰惨なパーティー会場・その2

菜摘にスポットライトが当たり、会場の招待客が一斉に菜摘を見て割れんばかりの拍手を贈った。

「――菜摘は見た……。勝ち誇った理緒の冷やかな顔を。勝利者の顔だ。。。」  
私だけならともかく、慎司さんにまで恥を掻かせようというの？なんて人なの？

「俺が行って来るから大丈夫。。。」  
そう言っただけで席から立ち上がるうとした慎司を菜摘が制した。

「慎司さん。。私、大丈夫。。あなたに恥を掻かせたりしませんから。。。」  
そう言っただけで、背筋を伸ばしてゆっくり壇上向って歩いていった。。。

菜摘は凜として、理緒を牽制する程の力のある目で見た。  
理緒は一瞬たじろいだ。。。  
壇上に上がり、理緒からマイクを奪うと、菜摘は呼吸を整えるように胸に手を置いて、それから姿勢を正して会場の人達に挨拶し始めた。

「この度は、『リストランテ・クロサワ』広尾店オープンおめでとうございます。えー、初めに。。。正直申しまして、突然ご指名を頂いたので、少し戸惑っておりますし、お聴き苦しい点もあるかと存じますが、一生懸命心を込めて弾かせていただきます。何の曲がいいのかと、ここに上がるまでの間悩みましたが。。。リストの『愛の夢』を弾かせていただきます」

マイクを理緒に返すと菜摘はゆっくりとグランドピアノの椅子に腰かけ、少し目を閉じて精神を集中させるようなそぶりを見せて、それから目を開いて弾き始めた。彼女らしい優しい温かな弾き方だった……。

そして、理緒は負けたと敗北感を感じた……。こんな小娘に……父親が育児放棄して施設で育ったとも耳にした。

父親はインサイダー取引に手を染め逮捕……犯罪者の娘!! そして、私から恋人を奪った!!

絶対にこの小娘を許す物か……。慎司さんから引き離して、慎司さんを奪ってやる!! 理緒は憎悪の炎を更に燃やした。

菜摘は弾き終って、会場の人達に深々と一礼し、壇上から降りて慎司の所に戻って行った。

その間、皆が感動の表情で菜摘を見て、割れんばかりの拍手を贈り続けた。

その時、「ナツミ!!」自分の名前を呼ぶ声がして振り返った。

「アルフォンス先生!!」

何と会場に、施設にいた頃ずっとピアノを教えて下さった音大ピアノ科の教授でもあるドイツ人のアルフォンス氏がいた。

60歳過ぎの、真っ白な綺麗な白髪を後ろに掻き上げたヘアで、淡い色合いのカラーシャツに、美しい深緑のループタイを締めて、ジャケットを羽織ってる。一見、芸術家らしい険しそうな、気難しそうな雰囲気があるが、ブルーの瞳には人間的な優しさを漂わせてる。それに実は結構冗談好きの、いたずらっ子な愛嬌のある一面もある。

「先生どうしてここに？」

「ナツミ、忘れましたか？ 先生はドイツ人ですがイタリア料理も

大好きです。ですから、イタリアンレストランも良く行きます。それで招待されたと言うわけです・・・」

「まあ・・・そうでしたか・・・」

「ナツミの作るパスタ料理も美味しかったですね」

アルフォンス氏がボソツと菜摘に耳打ちした。

「このよりも、ナツミのパスタの方が美味しいですね・・・」  
それから、ヒョイと肩をすくめて、手を上に上げて戯けて見せてから、首を横に振って、一差し指を口に当てて秘密ね！というジェスチャーをした。

「ナツミのピアノ最高でしたね」

「先生のお陰です・・・」

菜摘が恐縮して、頬を染めて含羞んだ。

「そうですね。私の教え方が良かったですね」

「そうやっておどけて見せた。」

回りの人がこのやりとりをみて、集まってきた。

「音大教授のアルフォンス氏ですよ？彼女はお弟子さんなのですか？」

「はい！とても優秀な私の愛弟子ですね」

「せ・・・せんせいっ。そんな事言わないで下さい・・・。だめな生徒でしたから・・・」  
菜摘が慌てて訂正する。

「いえいえ・・・大変素晴らしい」

そしてアルフォンス氏が菜摘に拍手を贈った。

回りの人達が皆、一目置くような目で菜摘を見始めた……。

「では……ナツミもパーティー楽しんで下さいね！」

人だかりが出来始めたので、アルフォンス氏が手をひらひらさせて、他の方に去って行った。

菜摘も慌てて回りの人にペコリとして、慎司の方に早足で戻った。

「いやあ……どうなる事かと心臓が凍りつきそうになったけれど、菜摘は凄いいよ!!」

慎司が嬉しそうに菜摘に拍手を贈った。

誰の拍手よりも、慎司から贈られる拍手が一番嬉しいな……菜摘はそう思った。

「慎司さんに褒めてもらって凄く嬉しいです。それに慎司さんに恥を搔かせないで、何とか丸く治まって良かった……」

含羞みながら微笑んだ。

「え？俺の為に？」

慎司が頬染めて、嬉しそうに微笑んだ。

「慎司さんに絶対に恥を搔かせたくないって思いました……」

そういった途端に、慎司が椅子から立ち上がって菜摘をギュッと抱きしめた。

「嬉しいな……でも……俺の事はいいから、そんなやわに出来てないからね……決して無理はしないでくれよ」

会場の人が沢山いる中で……『キヤーツ！は……恥ずかしい』

そう思ったけれど、抱きしめられて凄く嬉しかった。

．．．私．．私．．慎司さんに恋しちゃったかも．．．。  
菜摘は自分の気持ちを悟った気がした．．。

回りの人達は、この幸せそうな2人の様子が微笑ましくて、面白そうに、楽しそうに眺めていた。

黒沢も、『すてきな奥さんを見つけて良かったな！』慎司に向って、心の中で呟いた。

我が儘なボンボンという感じで少し癖のある所はあるが、黒沢も根は悪い人ではない。

幼なじみでもあり大切な友人でもある慎司の事を心から心配していたのだった．．。

2人の幸せそうな様子を見て、凄くホツとしたような安堵感を感じた。

会場の皆が2人を祝福した．．1人を除いては．．。

理緒は益々嫉妬の炎を燃やした。燃え盛る炎で自分の身が焼き尽くされそうだった．．。

（慎司さんの腕の中に抱かれているのは、私のはずだったのよ．．．絶対．．絶対許さない！！）

心が通い始めた菜摘と慎司．．。

この2人の間を裂こうと、2人の知らない所で密かに邪悪な空気が流れ始めていた。

（第19話に続く）

第18話 陰惨なパーティー会場・その2（後書き）

自分で書いてて、「理緒さん、こ……恐すぎる……」時々背筋  
が寒くなります……。 (^| ^;) )

## 第19話 誕生日プレゼント

慎司は書斎の机の上の卓上カレンダーを見ながら、ぼんやりと物思いにふけていた。

菜摘と結婚式を挙げたのは、5月の上旬の事だったな．．．。

ヨーロッパでは、6月が1年中の中で最も雨が少なく良いお天気に恵まれる為、6月に結婚式を挙げるのはいい時期で、6月に挙げると幸せになれるとも言われてるそうだが、梅雨時になる日本ではあまりいい時期とも言えない．．．。

昔はジュンブライド（6月の花嫁）が人気が高かったようだが、最近は、メイブライド（5月の花嫁）が結構人気らしい．．．。

お天気にも恵まれて、新緑の季節．．．日本の気候にはいい時期だと思ふ．．．。

いい時期の結婚式だったが、自分と菜摘にとっては忘れられない最悪の結婚式だったな．．．。

あの時はつまらない復讐心に燃えていて、彼女に全く関心も無く、本当に可哀想な事をしてしまった．．．。

思い返すと、彼女に対してとても冷たくなんて横暴な態度であったか．．．。あの事を思い返すと、心が痛むし身の竦む気持ちになる。嫌われて当然のような事をしたし、まだ幼い彼女にとってはとても辛くて恐ろしかった事だろう．．．。

微かに覚えている菜摘のウェディングドレス姿．．．。可愛かったな．．．。

あまり大した写真も撮らなかったし．．．。残せるものが無いのが残念だ．．．。

結婚を決めてすぐに式を挙げたようなものだったから、エンゲージ



リングもあげられなかった．．．あの時はあげる気も更々無かつたし．．．。

後々ちょっとしたパーティー用にとそれなりのグレードの石のついた指輪は何点が買ってあげたが．．．。

エンゲージリングと呼べる指輪はとうとうあげられなかった．．．。

マリッジリングも、適当な安物の酷い物だった．．．。あれは本当に最低の安物だった．．．。

政略結婚という劇の小道具のつもりだったから．．．。

あまりにもかわいそ過ぎると思い．．．俺がすっかり無くしてしまつたという事にして、平謝りして、もう一度一緒に買いに行ったのだったな．．．。

片割れが無くなった指輪をはめてるのは縁起が悪いとか何だかんだと言つて、彼女がはめている最低の安物のあの指輪は外させて、実はこっそり処分してしまつた．．．。

やはりこっちの方が良いな．．．。

慎司は左手の薬指に光るプラチナのヨーロッパ調のアンティークなパターンのついたマリッジリングを見て一瞬フツとにやけた。向ここの神話にちなんだネーミングのついたリング．．．。

縁起のいい物らしい．．．。

結婚指輪ははめてても、未だに清い関係だ．．．。

政略結婚で若過ぎる奥さんを貰つたこれは戒めでもあるな．．．。

仕方ないな．．．。

なんて！！妄想をしている場合ではなかった．．．。全く．．．誰かさんみたいじゃないか！！

7月の卓上カレンダーの『26』に赤丸がついている所を見つめて、フーツとため息をついた．．．。

菜摘のバースデー．．．。何をあげようか？ 本人に聞くしかない

か．．。

そんな時、グツとタイミングでドアをノックする音が聞えた。

「はい、どうぞ」

カチャリとドアが開いて、菜摘がおずおずと入って来た。

「あのお．．お仕事お忙しいですか？」

「いやいや全然．．入って」

入試数学の問題集を抱えて入って来た。

「分らない所があるのですが．．」

「いいよ．．。でも、教える代わりに、俺にも分らない問題を教えてくれるかな？」

「ええーっ。私が慎司さんに教えてあげられるような勉強なんてありませんし．．」

物凄くタジツとして、焦るその姿が愛らしい．．。

「いやいや．．これは物凄く難しい難問中の難問なんだ．．。

でも、菜摘なら絶対に解ける問題なんだ．．」

わざと眉をひそめて、凄く困って悩んでいる様子を見せた。

「えーっ、そんな問題があるなんて．．。なっ．．何ですか？  
その驚く様子に、慎司は心の中でクスリと笑った。

「実はね．．カレンダーのこの日なんだが．．」

慎司は赤丸のついた日を指して．．。

「プレゼントは何がいいかな？」

「なっ．．．な．．．そんな事でしたか．．．」  
拍子抜けしてカクツとする菜摘．．．。そしてほんの少し考えてから、ポツリといった。

「花束がいいです．．．」

「花束？」

意外な物で、慎司はちよつと驚いた。

「本当は、アネモネが好きなのですが、私の誕生日の季節と言えばひまわりなので．．．。小さなひまわりの花束を下さい」

「え．．．。そんな物でいいの」

「私、男の人から花束を貰うなんて事無かったですし．．．ちよつと憧れなんです。良くドラマとか、本でもそんなシーンがありますよね．．．。ロマンティックと言うか．．．素敵だなあーと思って．．．」

「お安い御用だけど．．．でも本当はアネモネの花が好きなんだ．．．」

「はい。凄く好きです．．．でも．．．」

「でも？」

「花言葉は嫌いなんです。儚い夢とか薄れゆく希望とか．．．。悲しい花言葉ですよ？ 今はそんな事思いませんが、花言葉がなんだか私みたい．．．アネモネって私みたいだわ．．．って思った事がありました。」

誰もいない広い場所にポツンと一輪だけ咲いているアネモネが私  
で．．．誰か背中に羽根を付けて自由に飛べるようにして欲しいな  
と思った事もありました．．．。でも、今は羽根がついたアネモネ  
です．．．私．．．」

「そうかい．．．」

その言葉を聞いて嬉しくなった。

\* \* \* \* \*

そして．．．菜摘のバースデーの日．．．。

夜景の美しい高層ビルの最上階のフレンチレストラン．．．。

「お誕生日おめでとう．．．」

慎司は可愛らしいひまわりのアレンジの花束をプレゼントした。

「わあ．．．ありがとうございます。凄く可愛い〜。こつ言つ素敵  
な場所で、恋人から花束を貰うのが憧れでした．．．。  
夢みたいです．．．嬉しい．．．」

「実はもうひとつあるんだ．．．」

「え．．．?」

慎司は小さなリボンのついた宝石箱を渡した。

「開けてみて．．．」

菜摘が箱を空けたら．．．。

「わあ〜っ。かわいい．．．」

それは、羽根を広げたエンジェルがアネモネの花を手で大切に抱えているモチーフのペンダントだった・・・。

アネモネの花の中央には、キラリと輝く一粒のダイヤモンド・・・。

「気に入ってくれた？」

「はい・・・凄く嬉しいです」

「その羽根を広げたエンジェルは君だよ・・・」

「・・・このエンジェルに羽根を与えてくれたのは慎司さんですね？」

天国のお母さん・・・私ずっと笑ってるでしょ？ とっても幸せです・・・。

(第20話に続く)

第19話 誕生日プレゼント（後書き）

やっとタイトルにちなんだ話しを書く事が出来ました。ずっとこんなシーンを書きたいなと思ってました。

## 第20話 サマーパーティーでの衝撃

「え？．．．プールサイドでサマーパーティーですか？」

休日、イングリッシュブレックファーストメニューの朝食を食べながら、菜摘は慎司から、来週あるパーティーの話を聞いているところだった。

「ああ．．．。うちの社の取引先の社長宅で行なわれるのだが．．．夫婦で是非と言われてね。いいかな？」

パーティーでは必ず何か起きるので（必ず理緒絡みなのだが．．．）、慎司も菜摘の顔を伺い伺い、申し訳無さそうに遠慮しながら聞いてきた。

「慎司さん程の大手の会社のトップとなれば、パーティーに出席する機会も多いと思いますし、私でお役に立てる事があるのなら．．．微力ながらお力添えさせていただきたいなと思います。いつも慎司さんにはお世話になってますし．．．。なにもお返しする事が出来ないですし．．．。」

君は俺の妻なんだから．．．面倒を見るのは当たり前だし、そんな負い目を感じて遠慮しなくてもいいのに．．．。いくらが心が通じ始めてきたとは言え、菜摘にはまだ妻と言う感覚がないのだろうなと慎司は淋しく思った。

「すまないね．．．。」

「いいえ．．．。このぐらいしかご恩返し出来ませんし．．．私でお役に立てれば．．．。」

「君は俺の妻なんだから、そんな恩返しなんて水臭い事言わないで

よ．．．．」

何度も言われると流石にちよつと気になってしまい、心の内を打ち明けてしまう．．．．。

「そうでしたね．．．私、妻と言う立場なのでしたよね」

．．．．うん。やはり自覚が無いな．．．。

「まあ．．．外ではね．．．僕達の間では、ゆっくりとそういう形になっていければいいと思うけどね．．．。夫が妻を養ったり、面倒を見るのは当たり前だから、あまり負い目に感じないで欲しいな．．．。淋しい気持ちになるよ」

「ごめんなさい．．．自覚が無さすぎますよね．．．」  
シユンとしたその素直さが可愛く、なんだかちよつと痛々しくも見えた。

「まあ．．．この結婚のスタートは、俺のせいでもあるからね．．．。しょうがないと思ってるけど．．．きみはなにも遠慮しないで、堂々と俺に甘えていいんだからね．．．。いっぱいおねだりもしてくれよ．．．。」

「はあ．．．．」

「では早速．．．パーティーのドレスなど買い物に行こう!」

「え〜っ。また．．．ですか．．．」

実はショッピングはちよつと苦手な菜摘だ．．．。  
着る物は沢山あるのに．．．。

いつの間にかあの広いウォークインクローゼットの中は、溢れるぐらいの衣装の山になっていた。



初めてここにやって来た時は、ハンガーパイプに下げる物はそのウエディングドレスに着ただけだったのに……。

「そうそう……。あれは少し季節外れだし、プールサイドパーティーらしい清涼感ある雰囲気のパフォーマルにしよう……。」

慎司にとっては、パーティー会場の誰よりも綺麗に着飾らせて、自慢したくて仕方ない……。

他の誰の妻よりも、若く美しく可憐で可愛いと思ってるのだ。

「そ……そうでしょうか……。」

今日は、もう少し勉強を進めたかったのに……。渋顔の菜摘。

「ほらあ……。サツサと食べて……。早く出かけよう!」

嬉しそうにソワソワする慎司とは対象的に迷惑顔の菜摘……。

「はあ……。」

\* \* \* \* \*

慎司の取引先の、大手商事会社の社長宅の家は、アンダルシア地方の中世ヨーロッパ風の佇まいで、白壁がとても美しい2階建ての屋敷だ。

外装に美しく施されたモルディングとギリシャ神話に出て来そうな円柱のアステイルコラム（飾り柱）、屋敷の中央のパーティオ（中庭）にプールがあり、夜間のプール照明がとても幻想的で美しく、この屋敷の自慢のひとつでもある。

プールの回りの回廊には、真っ白なパラソルの付いたテーブル椅子がぐるりと囲み、そこで歓談を楽しんだり、自慢の出張シェフとバーテンダーのおいしい料理とお酒を楽しむ……。

「わあ．．．素敵ですね．．．溜息が出てしまいます」  
菜摘は今まで見た事の無い夢のような世界に、目を輝かせウツトリ  
していた。

「そうかい．．．」

慎司にしてみたら、今日の菜摘の装いの美しさにウツトリ状態だ．  
。。  
今日の菜摘の装いは、清楚に胸の谷間を強調させないビスチェに、  
同色の細い肩ひもが付いたもので、スカートはポリウエスを抑えほ  
つそりさせたスレンダーラインに、ウエストは高めのハイウエスト  
切替え。淡いブルーの幾重にも重ねたシフォン生地で、まっ白いオ  
ーガンジーの花が鏤められていて、所々ダイヤモンドのような輝き  
をみせるスパンコールがついてて、水面に浮かぶ白い花のようなド  
レスだ。

やはりこれにして良かったなと、大満足していた．．．気をつけて  
いても少し顔が緩む．．．。

このドレスには菜摘も大満足のように、試着していた時とてもはし  
やいでいた。

その姿を思い出すと益々顔が緩んでしまう．．．。

その時だった．．．。今日のパーティーの主催者でもあり、この素  
晴らしい屋敷の主でもある、大手商事会社の社長、大善義郎だいぜんよしろうがやっ  
て来た。

年は60歳過ぎで、自家用ヨットや自家用ジェット機を自分で操舵  
操縦し、あちこち旅したり、ふらりと海外旅行に出掛けるのも大好  
き。よく日に焼けた茶褐色の肌に真っ白な歯を見せて豪快に笑う、  
明るくワイルドな人だ。人望も厚く人に好かれるいい人だ。特に、  
こういった家を建てるぐらい、スペイン南部地方を愛し、何度も訪  
れているほどだ。

「これはこれは・・・葉山さん・・・良く来て下さいました。こちらの方は奥様でしょうか？」

「はい。家内の菜摘と申します」

「どうも初めまして・・・今日はこんな素敵なパーティーにお招き下さり、ありがとうございます」

慎司が菜摘を紹介し、菜摘も挨拶した。

「いやあ・・・素敵な奥様ですね・・・水の精のオンディーヌの様ですよ・・・。葉山さんは幸せ者だ・・・」

真っ白な歯を見せて、ハハハと豪快に笑い、暫く談笑してから大善氏は「どうぞ今日は思いきり楽しんでいって下さいね」と言って去って行った。

「とても豪快で素敵な方ですね」

菜摘が大善氏の後ろ姿をほほ笑みながら見ながら言った。

「本当にあのパワーは凄いね。俺も圧倒されまくりだよ・・・。けどね・・・」

慎司がボソボソと小声で菜摘に耳打ちした。

「アンダルシア系の話しは禁句だよ」

「えーっ。何ですか？」

菜摘が不思議そうな顔で慎司を見つめた。

「いやあ・・・。一度エライ目にあっただけどね、話し出すと止まらないんだ・・・。適当に言っつてその場を離れようと思っつても・・・。羽交い締め状態でね、解放してくれないんだ・・・。特にお酒が入るとヤバイ・・・。この業界では有名な話しなんだがね、大善氏にはアンダルシア系の話は禁句だっつてね・・・」

「ええーっ。そうなんですか．．．。わあ．．．危なかった．．．。『このお屋敷はアンダルシア地方の建物のイメージですか？』って聞こうかなって思ってたから．．．。」

「うわっ。それは危なかった．．．。」

慎司の本当に焦っている姿を見て、菜摘が可笑しくてついつい笑ってしまった。

2人して笑い合っている時だった．．．。

「あらあら．．．お二人とも仲が宜しくってね」

ふと見たら、そこには理緒が立っていた。

「何で来てるんだ？」

慎司の顔がサツと曇って、見るからに嫌そうな表情に変わった。

「『何で来てるのか』なんて、元フィアンセに対して心外な言葉だわね」

挑発的な理緒の言葉に菜摘は圧倒されてしまった。

「俺は妻も迎えたし、お前とはもう何の関わりも無いし、付き纏うのはいい加減にしてくれないか．．．。」

「なによ！政略結婚じゃない．．．。こんなおねしょ臭い小娘の何処がいいのよ．．．。」

「俺にとっては、最高のかみさんだし、彼女の事を中傷する事は許さない！！」

それに、こんな場所で、くだらない話しを持ち出して場の雰囲気が悪くするような真似はやめてくれないか！！」

「貴方は私が貴方を捨てたと思っっているかもしれないけれど、貴方に会わせてくれなかったのは貴方のお母様なのよ!!!」

「えっ?」

「とにかく私の話しを聞いてちょうだい．．．そうじゃないと私、何をするか分らないわよ．．．」  
半ヒステリックな理緒の甲高い声に、回りの人が何やら揉め事のようだとだんだん気付き始めていた。

「慎司さん．．．私なら気にしなくていいですから．．．こんな場所、パーティーの雰囲気壊してしまう事態になってしまったら、大善さんに申し訳無いですし．．．」  
菜摘が回りの目を気にしながら、この状況をどう沈静化させたらいいものかとオロオロして、不安そうな表情をしていた。

「菜摘ゴメン．．．。理緒とはもうとつくの昔に終わってるし、この際だからハッキリ言っておこうと思う．．．」  
そう言つて、菜摘をギュツと抱きしめてから、理緒と慎司は中庭に抜けるエントランスを通り抜け洋風庭園の方に消えていった。

1人ポツンとなつて居心地が悪くなった菜摘は、化粧直しするふりでもして、暫く時間を潰そうと思い、パウダールームに向つた。  
パウダールームの扉を開けようと思つた時だった、ボソボソと女性2人の話し声が聞えて来た．．．。

「ねえねえ．．．見た?さっきの、元フィアンセと大企業の若社長との修羅場シーン」

「見た見た．．．私、理緒さんと同じ大学だったから良く知ってるんだけど、彼女相当な阿婆擦れなのよ．．．」

「ええーっ。そうなの？」

「義理の弟が無理心中みたいにならば若社長を巻き込んで、車で崖をダイブした事故って有名じゃない？ あれって、義理の弟が勝手に理緒さんに横恋慕して、勝手に嫉妬して、あんな事になったように世間では騒がれてるけど飛んでもない．．．」

「ええーっ。なにそれ．．．」

「私ちようど目撃しちゃったんだけど．．．若社長と付き合う前に、あの弟とデートしている所を目撃しちゃったのよ．．．他の子も何度か目撃したらしくて．．．こっそり付き合ってたみたい．．．こっそり付き合っていたのは、若社長が本命で、彼に接近する為利用する目的で義理の弟を誘惑したからじゃないかと思えるの．．．だって、若社長と付き合い始めたら、自慢気に見せびらかしていたもの」

「という事は．．．義理の弟はスペアくんてこと？」

「酷すぎるよね．．．この事知っている人は皆、心傷めてるわよ．．．弟にしてみたら、自分の恋人が兄に奪われて婚約までされて、気がおかしくなりそうになるわよね．．．兄の方は兄の方で、訳も分らずに事故に巻き込まれて片足失って．．．こんな悲劇が起きたら普通、自分のせいだって己を責めて、恋人の幸せを願うと思わない？」

「なのに結婚してやっと幸せになり始めた社長にまだ纏わりついてるでしょ．．．呆れちゃったわよ．．．」

「酷いねー。なんだかゾツとするわね．．．恐ろしい人だね．．．」

「ここであんまり長居していると誰か来るかも知れないわね、そろそろ行きましようか？」

「ええそうね．．．」

パウダールームのドアがカチャリと開いて、菜摘はとっさに部屋の物影に隠れた。

物凄くシヨックだった．．．。きつと慎司はこの事を知らない．．．。義理の弟を相当恨んでいる様子だ．．．。あの事故にこんな悲劇が隠されていたなんて．．．。

(第21話に続く)

## 第21話 初恋の人との再会

パウダールームから出てきた女性2人は、菜摘から見ると随分と大人の女性という雰囲気でした。

理緒さんと同世代みたいだから、私より10歳ぐらいお姉さんだものね．．．。

理緒の『おねしょ臭い小娘』という言葉が思い出され、心に突き刺さった．．．。

その女性達の連れの男性達がプールサイドの席の一角で、お酒を酌み躲しながら楽しげに談笑している様子が見えた。

男性達は、女性達よりは少し年上の30歳代前半ぐらいの様子に見える．．．。

その席に女性達が戻ると、今度は4人で楽しげに飲食しながら会話しはじめた。

恋人同士のような雰囲気よりもある程度落ち着いた様に見えるので、夫達が親友同士の2組の夫婦なのかなと感じた。

菜摘は暫く呆然としてその場所に立ちつくしていたが、やがてパウダールームに入って行き水栓金具のレバーを上げ水を出すと、その水を手ですくって顔を濡らした．．．。

鏡を見たら、水でビショビショに濡れた青ざめた顔色の自分が映っていた。

「この事を慎司さんに話す？いいえそんな事とても言えないわ．．．どうしたらいいの？ 理緒さんは危険な人だわ．．．」

あの女性達の話していた事が真実なのかどうかは良く分らないが、信憑性の高そうな雰囲気がある。

でも、もしそうだとしたら、とても恐ろしい話だ．．．。

菜摘は化粧を直すと、気を取り直してプールサイドに戻った．．．。



あまり目立たない端の方の、真っ白なパラソルの付いた席に座り、キョロキョロ見回したが慎司の姿はまだ無かった。

「慎司さん．．．まだ理緒さんと話しているのかしら．．．」

ポツンと1人．．．すごく寂しい．．．。それになんとか悲しい気持ちにもなってきた．．．。

ウェイターがトレーに色々な飲み物を持って来てくれたので、ノンアルコールカクテルのサルトガ・クーラーを頼んだ。

ジンジャーエールとライムジュースの入った清々しい飲み物．．．。お皿に色々な種類の美しく盛りられたカナツペのおつまみも持って来てくれた．．．。

思い返せば毎回毎回理緒さんが現れて、パーティーの雰囲気壊して．．．いつもポツンと置いてきぼりになってしまつて．．．。なんだかやるせないような気持ち．．．。ついつい溜息が出てくる．．．。

そんな時だつた．．．。

「あれ．．．なつちん？」

「え．．．？ あのだ．．．もしかして．．．ヒロにいちちゃん？」

振り返つたら、幼い頃一緒によく遊んだ4歳年上の、憧れのお兄ちゃんのような存在だつた城島裕希しよじま ひろあきが立つていた．．．。

裕希は城島物産の御曹司で、福祉に熱心な両親が園に多額の寄付をしてくれたり、ボランティアでしょつちゆう訪問してくれてた関係で、裕希もしょつちゆう園にやつて来ていた。

裕希の両親は菜摘の事をとても気に入り、ぜひ養女という話があつたのだが、実の父親である瀬川がそれを阻止した為、結局その話しは立ち消えとなつてしまつた。

もしあの時城島家の養女となつていたら、義兄妹となつていたことになる．．．。

裕希は高校から渡米して向こうの大学を出て、最近日本に戻って来た。菜摘と会うのは、8年ぶりだ……。

「やっぱりなっちゃんかー。いやぁ……綺麗になっただな……」

裕希は子供の時も上品な凄く綺麗な顔をしていたが、更に見違えるように素敵になっていた。

あの時もスラリと背が高く、頼もしく見えてたけど、更に背が伸びた感じで骨格もがっしりしてて、とても立派に見えた。

菜摘の初恋のお兄ちゃん……大好きだったお兄ちゃんだ……ヒロにいちやんが渡米することになり、お別れとなった時にはこっそりと布団の中で大泣きした。

「ヒロにいちやんも、凄く素敵になっただねー。こんな所で会うなんて……夢じゃないよね？」

思わぬ人との再会に、さっきまでの沈んだ気持ちは何処かに吹き飛んで、心の中がフワーツと明るくなった。

「俺も凄く驚いたよ……。でも何でこんな所で1人ポツンとしてるんだよ」

実はさっきから菜摘じゃないかと気になって、ずっと様子を見ていたのだった。

「うん……連れが用事があつてちょっと席外してるから……」

「そうなのか……。でも席外してる時間が長くないか？」

「うん……ちょっとね取り込み中だから……」

「彼氏か？」

「ううん．．．夫．．．」

「えええーっ。結婚早すぎないか？」

大変驚いて、椅子からずり落ちそうになった。

内心菜摘の事を思っていたので、凄くショックな気持ちだった。

「うーん。仕方無かったの．．．」

「まさか！！政略結婚か？」

「まあ．．．ね．．．」

違うと言いたかったけれど、あの結婚の始まりはそうだった．．．。

そして、今でもあやふやな関係だ．．．。

何と答えていいのか正直困った。

「辛い思いしてないか？困ってる事があつたら俺がいつでも力になるからな．．．」

凄く心配そうに、菜摘の顔を覗き込んだ。

「うん、どうもありがとう．．．」

相変わらずヒロにいちちゃんは頼もしいなと思った。

「なっちゃん、メルアドと連絡先交換しておこう．．．」

政略結婚なんて！！もし、なっちゃんが不幸な生活を送っているのなら、俺が救ってやる．．．。

裕希は心の中でそう思った。

「あ．．．うん」

お互いに赤外線通信で交換した。

「これで安心だ!!困った時にはすぐに連絡しろよ．．．飛んでくるからな!!」

「ヒロにいちやんありがと．．．」

慎司がなかなか戻って来なくて、すっかり待ちくたびれて、だんだんお腹も空いてきていた菜摘だったが、こういったパーティーに慣れている裕希は、サツサとビュツフェコーナーから色々な料理を沢山持つてきてくれて、2人して積る話などあれこれとお喋りしながら仲良く料理をつづいた。

．．．ヒロにいちやんはやっぱり頼りがいがあつて、すごく優しいな．．．。全然変わつてないな．．．。

「お腹もいっぱいになつたし．．．ホールに踊りに行かないか？」

「でも．．．連れが．．．」

「こんな長時間ほつたらかしにしておいて、ちよつとどうかなくと思つよ。少し懲らしめと言うか、心配させた方が良くないかい？」

「え．．．そうかな？」

菜摘も慎司に良いとは言つたものの、毎度毎度置き去りにされて、更になかなか戻って来ないので流石に心の中がモヤモヤ複雑な気持ちになつていた。

「うんうん．．．」

「そうよね。こんなに長い時間．．．ちよつと酷いよね」

「そうだよ．．．。何か文句言ってきたら、俺がガツンと言ってやるからな!!」  
闘争心むき出しのその様子には戸惑ったけれど、自分の事を思ってくれる頼れる人が身近にいるのはとてもありがたかった。  
さっきまで独りぼっちで淋しくて不安だったから．．．。

\* \* \* \* \*

裕希はこういったパーティーにも幼い頃より慣れているのか、ダンスのリードも上手かった。

「なっちゃん、結構上手じゃないか!!」

「ヒロにいちちゃんのリードが上手だからだわ」

ちょうど裕希の今日着て来たタキシードはブルーグレーで、菜摘のドレスと色合いがピッタリ合っていて、まるでパートナーのような雰囲気に見えた。

水の精霊みたいな可愛らしい若い女性と、城島物産の若き御曹司の優雅なダンス姿は回りの人達の話題となり、回りの注目的になっていた。

どんよりした重苦しい気持ちで戻って来た慎司がその人だけに気がつき、驚愕した。

「菜摘!!」

なんだってあんな奴と楽しそうに踊ってるんだ？

慎司はツカツカと近付いて、裕希から菜摘を剥ぎ取るように、菜摘の手首を掴んで自分の方にグイと引き寄せた。

「キャッ!!」

バランスを崩して倒れそうになる菜摘．．。

「危ない！！」

裕希が上手にキャッチして事無きを得たが、裕希が菜摘を腕の中に抱くような格好になってしまった。

それを見て慎司は益々激怒した。

ふと過去の嫌な記憶．．理緒と秀治と己の三角関係という構図と嫉妬に狂った秀治の顔が浮かんできた。

本心は思いきり裕希をぶん殴ってやりたい気持ちだったが、大企業 のトップという理性がそれを押しとどめた。

「菜摘帰ろう．．．」

何も言わず裕希から菜摘を奪うと、無言で手を引いてエントランス に向った。

裕希が何か言おうとしたのを、そっとジェスチャーして菜摘が制し た．．。こんな所で殴り合いになってしまったら大変！！

2人の間に漂う嫌な空気を感じた。

パーティーがお開きになるのにはまだ宵の口．．。

エントランスには慎司の姿を見つけて、慌ててエントランスに横付 けされた自家用リムジンしか無かった．．。

「慎司さん痛いです．．そんなに手をきつく引つ張らないで！！」  
気がつけば、きつく掴んだ菜摘の腕には痣が出来ていた。

「ゴメン．．あいつは誰なんだ？」

さっきからは少し冷静になってきていた慎司がポツリと聞いた。

「彼は、昔の幼なじみです．．．」

「そっなのか．．．」

それから車に乗り込んでからの2人は一言も喋らず、重苦しい空気だけが漂っていた。

(第22話に続く)

## 第22話 闇の中の真相・その1

家に帰ると菜摘はすぐに自室に入ってしまった。

背中越しに何やら慎司が言ったようにも聞えたけれど、酷く疲れてしまつて聞く気にもなれなかった。。。

いつもパーティーに行くのと理緒が現れて、1人置き去りにされて・

・その繰り返しで、いい加減うんざりしてきていた。

ふと携帯を見たら、メール着信のお知らせランプが点滅している事に気がついた。

裕希さんからだ。。。

\* \* \*

俺のかわいい妹なっちゃんへ。。。

今日はなっちゃんに出会えて凄く嬉しかったよ

まさかあんな場所出会えるとは夢にも思わなかった。。。

日本に帰ってからすぐに光希園に行つて、リラ先生から、君が瀬川の家に取り取られた事を聞いてね、瀬川家を尋ねたら頑として君の消息は教えて貰えないし、そのうちインサイダー容疑で逮捕されてしまつし。。困り果ててる所だつたんだ。。。

日本に帰つたら、真つ先に君に会おうと思つてた。

色々言いたい事はあるけれど、政略とは言え結婚して夫のいる身・

・君に迷惑がかかるといけないから余計な事を口に出すのはやめておこつと思つ。。。

なっちゃん、君は幸せなのかい？困つた時があつたら、絶対に遠慮し



ないで僕に話しておくれ。

もし君がうちの所に養女として来ていたら、兄だったんだからね．．．。

今は兄さんだと思っていっぱい頼っていいからね。力になるからね。話したい時には、メールでも電話でも、遠慮しなくていいからね。

そうだ．．．今度光希園で会おうよ。幼い頃の思い出話とか色々ゆつくり話そう．．．。

じゃあまたメールするよ。

ヒロにいより．．．。

\* \* \*

ヒロにいの温かな優しいメールを読んで、涙が溢れた。

そして初恋の人だったヒロにいが突然目の前に現れて、正直心が揺れてしまった。

慎司の事が好きなのかどうか．．．だんだん分らなくなって来た。

『幸せノート』を広げて、菜摘は『ヒロにい』と書いてすぐに閉じた。

無性にヒロにいに会いたくなってきた．．．。

．．．．その時コンコンとノックする音が聞えて来た。慌てて『幸せノート』と携帯を引き出しの中に放り込み、手で涙をぬぐった。

「は．．．はい．．．」

カチャリとドアが開いて慎司が入って来た。

「菜摘．．．今日は本当にゴメン．．．」

菜摘の顔を見て、ハツとして、「泣いていたの？」菜摘の肩にそつと手を置こうとしたら、菜摘がさつと身を引いて躲した。

「私．．．ちよつと．．．疲れてしまいました。少し距離をおかせて貰えませんか．．．」

菜摘のその言葉には酷く衝撃を受けたようで、慎司はその途端パツと青ざめ、苦悩の表情に変わった。

「俺の事嫌いになってしまったの？」

「私．．．分らなくなっていました。

あなたにはいつも理緒さんの影がつきまどっていて、必ずパーティーでは置き去りにされて、独りぼっちにされて．．．酷く虚しい気持ちになってしまいました。それに今日のあの態度は．．．酷いです．．．」

「今日は本当にゴメン．．．。楽しそうに彼と踊っている菜摘を見たら、嫉妬の気持ちが沸き上って、つい手荒な事をしてしまって．．．」

「あの人は、兄みたいな人です．．．。彼のご両親が養女にと望んでくれて．．．あの人（父）が阻止しなかったら、ヒロにいの妹になつてたはずだったんです．．．。家族のいない私にとってはとても大切な人です．．．」

「ごめん．．．」

「それに．．．今日凄く衝撃的な話を聞いてしまって．．．どうしていいかも分らなくて．．．ヒロにいが居たから私．．．何とか自分を保つ事が出来たのに．．．」

「衝撃的な話して・・・」

菜摘はハツとして、つい余計な事を言ってしまったとしまったと思  
った。

「な・・・な・・・なんでもありません!!」

「教えて欲しいな・・・俺に関わる事なのか？」

「いいえ・・・いいえ・・・関係ありません!!」

菜摘が焦って否定すれば否定するほど、慎司には肯定している様  
に見えた。

「やはり俺に関わる事なんだね・・・もしかして・・・俺と理緒に  
関する事なのか？」

「知りません!! もう出て行って下さい!! 今日と一緒にいた  
くありません!!」

「もしそうなのなら包み隠さずに教えて欲しい・・・」

「あなたが傷つくだけです・・・それにそれが真実かどうかも分り  
ません・・・」

「それでもいいから教えて欲しい・・・」

「・・・」

菜摘は迷っていた・・・この事をもし話したら・・・慎司はどう思  
うだろう・・・酷く傷ついてしまう気がする・・・どうすればいい  
のだろうか・・・どうしたら・・・。

菜摘の戸惑っているそぶりをみて、慎司から話しを切り出してきた。「今日は本当にすまなかった。理緒が過去の事を引きずり出してきて、あの事故の後、俺の前から姿を消したのは俺の母が会わせようとしなくて阻止したからだとか妙な言いがかりをつけてきて．．．。だが、婚約解消を先に言い出して来たのは先方からだったし、あの頃、俺の体がこうなってしまったり、企業買収されそうになってかなりの負債を抱えながら懸命に建て直しを図ってる状況で、そんな事で俺とそれに付随するものに魅力がなくなったからだって思ってる。」

それに優しい俺の母が、訳も無く理緒を遠ざけたりなどするはずが無いし．．．。何か思う所があつての事だと思ってる。結果としてこうなつて良かったと思ってる。

俺も人を見る目が無かつたと言うか、今思えば何であんな女性に魅力を感じたのかも分らなくなつてしまつてるし、この際だからと、ハッキリ今後一切君と関わる事はないし、その気持ちも無いし、妻を愛しているからと言つてきた。

で．．．思いのほか手間取つて時間がかかつてしまつて．．．また君をほつたらかしにして、淋しい思いをさせてしまつて、本当に申し訳無かつた。あの後の事だったから、心情的に乱れてて、本当に君に手荒な事をしてゴメン．．．。」

「慎司さん．．．理緒さんの事はもう全くなにも思つてませんか？」

「全く恋愛感情は無いし、反対に不快感を抱いている」

「じゃあ．．．秀治さんの事は．．．。」

顔を伺つように菜摘がジツと見た。

「恨んでいないと言つたら嘘になるな．．．。だが．．．幼い頃か

ら兄弟として育てられてきた情と言うものなのか、もう恨み続けるのは終りにしようかなと言う気持ちが、最近現れてきている．．．」

．．．．その言葉を聞いてホツとした．．．。

「さっきの事です．．．慎司さんが秀治さんの事を恨んで決して許さないと言うのなら、そして、理緒さんに未練があるのなら、とても言えないと思ってましたが．．．。

でも．．．私は立ち聞きしてしまったただけなので、その事が真実なのかどうかは分かりません．．．それに慎司さんがとても傷つく事だと思つとこのまま言わない方がいいのかとも思つてます。それでも、聞きたいですか？」

「俺は、事故後死ぬほど辛い事も乗り越えて頑張つてきたし、どんな事も耐え抜く自信がある．．．。だから何を聞いたのか話して欲しい．．．。」

「わかりました．．．。」

(第23話に続く)

## 第23話 闇の中の真相・その2

菜摘は話さなかった方が良かったのかもしれないと後悔した……。目の前に立っている慎司は、真つ青な顔をして今にも倒れてしまいそうなそんな様子だった……。

「慎司さん……大丈夫ですか？」

「あ……ああ……」

そう言つて、部屋のカウチソファーに半ば倒れ込むように腰掛けた……。

「黙っていた方が良かったのかもしれませんが……私……とても酷い人間ですよ？こんな残酷な事を慎司さんに話してしまうなんて……ごめんなさい……」

「菜摘……君を抱きしめてもいいかい？」

菜摘は慎司の所に行つて、自分から慎司の背中に手を回しギュッと抱きしめた……。

「慎司さん……私どうしたら……」

「暫くこうやっていてくれるかい？」

酷く苦しそうな苦悩の表情で、肩が震えていた……。

「慎司さんの気持ちに静まるまで……私……ずっとこうやっていますから……」

……どのぐらいの時間こうやっていただろう……。

「菜摘．．．ありがとう．．．」  
慎司は菜摘の頭にそっと手をおいて優しく撫でてから、立ち上がった。

「実は．．．菜摘の勉強部屋兼アトリエの部屋．．．あれは秀治の部屋だったんだ．．．。あそこのクローゼットの中に秀治の描いた絵があるんだ．．．」

「私．．．絵がある事は気がついてました．．．もしかしたら秀治さんが描いた絵なのではないかと何となく感じてて、慎司さんに聞くのが恐くて．．．何も言えませんでした．．．」

「秀治のあの絵の理緒の絵が切られているのは気がついたかい？」

「いいえ．．．。あまり触れてはいけないものかも知れないと、クローゼットの中にあるそのままの状態になってますので．．．」

「あれを見に行こうと思ってる．．．。何か秀治の心が込められている気がしてならないんだ．．．」

「私も一緒に行つていいですか？」  
そう言つて、慎司の手を両手でそっと包んだ。

「ああ．．．ありがとう．．．」  
慎司は菜摘の手の上に自分の手を重ねた。

\* \* \* \* \*

菜摘の勉強部屋兼アトリエのクローゼットを開けて、慎司は秀治の絵を出して、一つ一つ感慨深げに見つめた．．．。

「俺の絵だ．．．」

慎司は自分の絵を見つめて、優しく絵を手でそつと撫でた．．．。

「凄く優しい絵だと思います。秀治さんは慎司さんの事すごく好きだったんだと感じます」

「うん．．．そうだね．．．」

それから切り裂かれた理緒の絵を出して見つめた。

「この絵だけ、色合いといい、タッチといい、とても激しい気がするんだ．．．」

「なんだか．．．怒ってるようなそんな感じがして来ます．．．」

慎司がスーッと切り裂かれた傷の部分を指でそつとなぞった．．．。

「!!!!」

その時何か感じたような表情をした。

それから切り裂かれた切り口に手を差し込み何かを発見した。

「これは．．．」

白い封筒が出てきた．．．。

「秀治さんの手紙？」

菜摘もとても驚いた表情をした。

慎司が封筒を開けると便箋2枚の手紙が出てきた。

\* \* \*

兄さん．．．ごめん．．．。

俺は兄さんを道連れに死のうと考えている．．．。

兄さんが何も知らないで、理緒と付き合って婚約までしてしまった



事は分つてる．．．。

理緒は最低な女だ！！

そんな女を兄弟揃って争うなんて．．．。とんだ御笑い種だ．．．。  
あの女が兄さんと結婚し、俺の義理の姉になるなんてとても耐えられないよ．．．。

兄さんは多分、俺が横恋慕してるように思ってるかもしれないけれど、理緒は俺に好きだと自分から告白して来たんだ．．．。

実は俺は親父の本当の子じゃないんじゃないかとずっと疑問に思つて来て、鑑定を受けたんだ．．．。

結果は思った通り．．．この家とは無縁の子供だったんだ．．．。きつと親父もそれを知っていたんじゃないかと思う．．．。

母さんは優しい人だ．．．血の繋がらない息子の俺にとっても優しくて．．．。実の母よりも全然比べ物にならないくらい素晴らしい人だ．．．。

そんな人を悲しませるような事を俺は実行しようとしている．．．。なんて奴なんだ．．．。母さんゴメン．．．。

理緒は俺に完全に惚れてると思ひ込んでいた．．．。だから実の子じゃない秘密を打ち明けたら、突然兄さんに接近し始めたんだ．．．。

元々それが狙いだつたのか．．．葉山家の財産が狙いだつたのか．．．。

あの程度の女に熱をあげて俺はとても馬鹿だったよ．．．。だけど兄さんも馬鹿だよ．．．あんな女と婚約するなんて．．．。

俺は兄さんが好きだけど．．．何でも持っている兄さんに酷く嫉妬して、親父や母さんに苦勞をかけてばかりいた．．．。  
兄さんにも素直じゃない態度ばかり．．．。

きつと卑しいんだ俺は．．．やはりあの女（実母）の卑しい血が流れているからかもしれないな．．．。

あんなつまらない女だけど．．．兄さんに理緒をとられたのは悔しいよ．．．。

全てを持っていて、葉山家の血を受け継いでいて．．．恋人も奪われて．．．俺にはなにも残ってないよ．．．。

兄さんゴメン．．．。

こんな俺を．．．あの世でいっぱい責めてくれていいから．．．。

いつかこの手紙が発見されたら、あの事故の真実はこうだったんだと分って欲しい．．．。

愚かな俺．．．なにも知らないで道連れにされたかわいそうな兄さん．．．。

そして、最低な女、理緒．．．。あいつは葉山家に一步も足を踏み入れさせてはいけない女だ．．．。

さよなら．．．親父．．．母さん．．．。

ごめん．．．。

秀治

\* \* \*

慎司は手紙を握りしめ、床にひれ伏して泣いた．．．。

菜摘は心配そうに背中から抱きしめて、一緒に涙を流した．．．。

「慎司さん．．．」

「あいつはとんでもない事をしでかしたけど．．．。最後の瞬間、

俺に抱きついて庇ってくれたんだ．．．。  
あいつがクツションになって、俺は肩足だけ失うだけで後は無傷で助かったんだ．．．。  
酷い奴だけど．．．あいつは本当は凄くいい奴だったんだ．．．。  
やっぱり．．．やっぱり．．．秀治は俺の大事な弟だ．．．。  
俺が天寿を全うして、あの世に行つて、秀治と再会したら、もう許してやるって言おうと思つてる．．．。」

菜摘は泣きながら、慎司の背中にへばりつきながら、『うん．．．うん．．．』と何度も言った。

．．．．天国のお母さん、慎司さんはやっぱり素晴らしい人だつて思います。

．．．。お母さんも彼の事、見守つてあげて下さいね。

(第24話に続く)

第24話 あの日から1年（前編）

光希園のウッドデッキの丸太の木のテーブルとベンチ椅子にテーブルをはさんで向かい合わせに腰かけて、リラ先生のお手製の焼き菓子とアイスハーブティーでお茶しながら、菜摘と裕希は思い出話など積る話で盛り上がっている所だ。

大きな木がいい日除けとなって、暑い夏の盛りでも心地良い憩いの場所だ。。。

「あの時はとても心配したけれど、そう言う事だったんだね。。。なっちゃんの事も大事にしてくれてるといいう事が分ったし。。。個人的にはちよつと残念な気もするけれど。。。」

「えっ？」

「あつ。。。いやなんでもない。。。もしかしたら俺の妹になっていたかもしれないんだ。。。これからもずつと兄貴と思つて困つた事があつたら遠慮せずバンバン頼つてくれよ。なっちゃんは俺の永遠の妹だからね」

「ヒロにい。。。どうもありがとう。。。困つた時にはヒロに相談するね。。。私も頼れる頼もしいお兄ちゃんだと思つてるよ。。。」

「うん！」

裕希は心の中で思った。。。。

（ひと足違いでなっちゃんの心を射止める事は出来無かつたけれど。。。これからは妹として接していかなければいけないのは辛いけど。。。

．．．ずっと．．．ずっと、なっちゃんの幸せを願ってるからね。いつまでも見守っていらつうって思ってるよ．．．兄貴としてね．．．（

\* \* \* \* \*

あの偽りの結婚式から間もなく1年になるうとしていた．．．。

「慎司さん、行ってきます」

「ああ．．．いつてらつしやい」

菜摘はついに芸大生となった．．．。

菜摘の若々しい女子大生姿を見ると、慎司はちょっと凹む．．．。

（19歳の女子大生に、29歳のおっさんか．．．。四捨五入したら俺は30歳じゃないか．．．。）

「はあ．．．自然と溜息が出た．．．。

「社長．．．どうされましたか？」

出勤前で迎えにあがった、第一秘書の折原がそれに気付き、何処か悪いのではないかと心配そうに聞いてきた。

「いや．．．気にしないでくれ．．．大した事では無い」

まさか秘書の折原に、年の差を感じてちよつと凹んだだけだ！．．．なんて言えないしな．．．。

その時携帯が鳴った．．．。

．．．．．黒沢からか．．．。

「はい．．．ああ．．．ああ．．．多分大丈夫だと思うが．．．あ

あ．．．分った。じゃあな」

電話を切った後、慎司はまた溜息をついた。

「あいつ．．．また店をオープンさせたのか．．．」

黒沢の店のオープン記念パーティーには、どうしても幼なじみである理緒がやって来るだろう．．．。

もう理緒が何を言っても相手にするつもりは無いし、大善氏のサマーパーティーでは、実は招待されていないにもかかわらず慎司が出席すると言う情報を嗅ぎつけて、パーティーにのこやって来て、場の雰囲気を乱したと言う悪評や、菜摘がパウダールームで耳にしたあの話しもどこから広まったのか噂が広まりはじめて、理緒の評判はかなり悪い物になっていた．．．。

更に、主だったパーティーではブラックリストに載るようになって、招待されないばかりか出入りも禁止状態なので、あれからは理緒と出くわす事も無く平和な日々を送っていたが．．．。

『菜摘は行かせない方が良くもしいないな．．．』慎司はそうしようと思心した。

．．．．．ところが．．．。菜摘がその事を知っていたのだ．．．。

「実は、ちょっと前に黒沢さんから家に電話がかかってきて、是非頼みたい事があるってお願いされて．．．」

「えええーっ。頼みごとって一体なんなの？」

「それは今はちょっと言えないんですが．．．」

「黒沢と言えば幼稚舎関係の繋がりで、理緒が来る可能性が大きいし、まさか理緒の策略なんじゃないか？ 凄く心配だし、気を使つて菜摘は欠席に思っていたのに．．．」

「初めて会った時には、慎司さんの大切なお友達なのですが．．．」

こんな事を言つては申し訳ないのですが、実は、ちよつと苦手でしたけど、今は親切ですし、悪い方ではないなと思つてますし．．．私でお役に立てるのならと思つてるんです」

「なんだか分らないが．．．嫌な予感がするし、凄く心配だよ．．．」

物凄く心配そうな顔をする慎司を横目に菜摘は全く気にもとめてない様子．．．。

「大丈夫ですよ．．．」

ニツコリ微笑んで、ちよつと何やら秘密を抱えている様にも見える．．．。

黒沢から頼まれた事つて一体何なんだ．．．俺には秘密なのか？ちよつとモヤモヤツとした気持ちになった。

\* \* \* \* \*

そして．．．『リストランテ クロサワ』青山店 オープン記念パーティー会場。

今日の菜摘は何故か、カジュアルなフォーマルの装いではなく、ロングスカートのフォーマルドレス．．．。

ウエストが高めの、スカートのボリュームは抑え目のエンパイヤードレスで、淡いパープルサテンに、シフォンのシルバールースを重ね、胸元にはたつぷりのギャザーに、パフスリーブ、同色系のシフォンのコサージュに、パールネックレス．．．。

何かの発表会のような出立ちで、女性客の殆どがショート丈のドレスの中では、ちよつと浮いた様にも見える．．．。

「その衣装はちよつと今日のパーティーには相応しくないだろう」

と言ってみたが、「これでいいんです」と珍しくいう事を聞かず、諦めてこのまま一緒に行く事にした。

理緒の事で怒って反抗してるのだろうか？なんだか分らない・・・。

エントランス入り口で、シェフと黒沢と挨拶を交わし、菜摘は自分でアレンジしたフラワーバスケットを手渡した。

「これは・・・これは・・・いつもありがとう。菜摘さんのアレンジフラワーは本当にセンスが良くて、うちの店のフラワーコーディネートをお願いしたいぐらいなんだ・・・」

「ありがとうございます。そう言って頂けて凄く嬉しいです」

「それから・・・今日の事よろしくお願いしますね・・・」

黒沢が顔を近づけてきて、ホソボソつと菜摘に耳打ちした。菜摘はうんうんと頷くようなそぶりを見せた。

（この2人・・・いつからこんな親しい関係になったんだ・・・）  
慎司は間近でこの2人のやり取りを見て、ムツとした。

「菜摘行こう・・・」

グイと菜摘の手を引いて、黒沢にはろくに挨拶もせずにつかつかた中に入って行った。

親しい友人主催のパーティーと言う事で、今日の慎司は油断してる様子で、あからさまに、焼きもちを焼いている様子が分る。

黒沢は、そんな慎司のそぶりをみて、苦笑した。

「あいつよっぽど奥さんに惚れてるんだな・・・全く・・・結婚して変わったな・・・」

今日は、ビュッフェスタイルではなく、ウェイターが大きな銀のトレーに料理を乗せ、定期的に各テーブルにやって来て、客がセレク



トした料理をとりわけるスタイル．．．。  
菜摘と慎司は、奥の方のテーブルに座る．．．。  
菜摘はチヨコチヨコ料理を選んでお皿に乗せては貰うが、全く食べようとはせずに、慎司を見てニコニコするばかり．．．。

「料理食べないの？美味しいよ．．．」  
そんな菜摘にちよつと心配顔の慎司．．．。

「後でゆつくりいただきますから．．．」

「そうなの？」

なんかやっぱり変だ．．．。いったいどうしたのか．．．。

理緒はやはり、このパーティーに来てるが、大きなパーティーでは招待されなかつたり、悪い噂話など本人の耳にも入ってるのか、前回のパーティーでハッキリと迷惑してる事を伝えたのが良かったのか．．．。今日は特に近付いて来ようという素振りは見せなかった。

ステージでは、イタリア人歌手によるカンツォーネの生演奏が行なわれ、皆、聞き惚れて、凄くいいムードだった．．．。  
そして演奏が終ったら、黒沢の挨拶がはじまった。

「皆様．．．本日はお忙しい中、『リストランテ クロサワ』青山店 オープン記念パーティーにご出席下さり誠にありがとうございます。えゝ本日は、私の幼なじみでもあり大切な友人でもある、葉山グループの社長、葉山慎司氏の素敵な奥様に私が無理を言つて、ピアノ演奏をお願い致しました。」

奥様の習われていたピアノの先生は、あの音大ピアノ科の教授でもあり、ピアニストでもあるアルフォンソ氏だそうで、前回のオープン記念パーティーにてとても素晴らしい演奏をしていただき、今回は是非にとお願い致しました。

奥様．．．どうぞステージに上がって下さい！！友人の慎司も一緒に．．．」

慎司は驚愕した．．．。どういう事なんだ．．．菜摘は大丈夫なのか？！

「菜摘．．．」

「慎司さん．．．こういう事だったので．．．一緒にステージに上がってくれますか？」

菜摘が含羞みながら、慎司に手を差し伸べた。

「あ．．．ああ．．．」

その手を取り、一緒にステージに上がった。

黒沢はピアノのすぐ側に、慎司用の椅子を用意し、そこに座らせた。菜摘は黒沢からマイクを受け取り、挨拶をした。

「えゝ黒沢さん。本日は『リストランテ クロサワ』青山店 オーブン記念パーティーにお招き下さり、ありがとうございます。

今日の為に一生懸命練習して参りました。心臓がバクバクしておりますが、心を込めて弾かせていただきます。 それでは、F・プーランク作曲 『ナポリ』よりイタリア奇想曲 をお聴き下さい」

会場の皆が驚くぐらい素晴らしい曲だった．．．。

慎司も驚いて言葉が出ないぐらい感動した．．．。曲を弾き終わった後、暫くシーンと静まり返り、その後に割れるような拍手が巻き起こった。

皆席から立ち上がり、惜しめない拍手を送った。

慎司も椅子から立ち上がり、力いっぱい拍手を送った。

「菜摘．．．素晴らしかったよ．．．」

「黙ってごめんなさい。慎司さんをビックリさせたくて・・・」

・・・その時だった。

『ガツシャーン』とコップを床にたたきつける音が聞えて、その音に拍手は止み、その音の方向を皆が一齐に見た。

「なによ・・・!!その子は、あのインサイダー取引で逮捕された、瀬川コンツェルンの娘じゃない!!親が育児放棄して施設に預けられた孤児じゃない!!」

理緒の悪魔のような叫びがパーティー会場に鳴り響いた。

(第25話に続く)

## 第25話 あの日から1年（後編）

場がシーンと静まり返って、重苦しい空気が流れた。

．．．．その時だった．．．。

「大変失礼しました。会場にちょっとお酒を飲まれ過ぎたお客様がいらっしやるようですね。

うちで出すお酒は優秀なソムリエのセレクトした素晴らしいワインですので、つつい、いつもよりも量が進んでしまふ可能性があります。皆様、十分お気をつけ下さいませ．．．。料理とワインの組み合わせがまたこれも絶妙です。十分お気を付けながら楽しんで下さいませ．．．。」

黒沢が素早く助け船を出して、会場の空気が少し和んだ時、すかさず会場のスタッフにこっそり指示を送った。

「お客様を休憩室にご案内して．．．。」

男性スタッフが数人理緒の手を取り、別室へと案内した。

「なにをするのよ！！私は飲んでないわよ！！離して．．．。」

理緒は回りの目が一斉に、冷やかな物に変化したのを感じ取った．．．。

敗北だ．．．完全に私の敗北だ．．．。

諦めて、スタッフに促されるままに会場を出ていった。

黒沢が助け船を出したにしても、場が白けてしまってシンとしたままの状態．．．。

半パニック状態で黒沢もどうしていいのやら言葉が出て来ない．．．。

このままでは折角のパーティーが、失敗に終わってしまいそう．．．。

その時菜摘にふとアイデアが浮かんだ。ちょっと厚かましいかなとも思うし、上手く行くかどうか不安もあったが、黒沢にこのアイデアをポソポソと小声で話して見た。

黒沢もウンウンと頷いて『助かります』と言うような表情をして、マイクを持って何事も無かったかのように話し始めた。

「え〜。皆様．．．続きまして、友人葉山氏の奥様菜摘様は、有名な声楽家、北原歌穂きたはら かほさんに、歌も習われてらしたそうで、今日は更に、歌もお願ひしております。どうぞ皆様、菜摘様の美しい歌声もお楽しみ下さい。

曲は、ヘンデルの曲で *l a s s i a   c h i o   p i a n g a*  
”私を泣かせてください”です”

スタッフが慌てて、慎司のすぐ側にスタンドマイクをセッティング、菜摘が慎司の手を取り、アカペラで綺麗なソプラノで歌い始めた。

一瞬、慎司を見つめてきた菜摘の少し緊張の視線で、何も言わなくても分った．．．慎司もしっかり頑張れ！と、手を握り返して、応援の気を送り続けた。

菜摘は慎司と一緒に歌ってるような気持ちになり、震えも治まり、勇気が湧いて来た。

そして、思い切り歌った．．．。その歌声は、心洗われるような、透き通った美しい歌声だった．．．。

慎司は勿論、会場の皆が感動した．．．。

オープニングパーティーは、理緒の事で一瞬場が壊れそうになったけれど、その後は盛り上がり、何とかいい雰囲気の状態で終らせる事が出来た。

「黒沢さんあの時は、助け船を出して下さいありがとうございます」

た」

帰る間際、菜摘が黒沢に丁寧にお礼を言った。

「イヤイヤ．．．こちらこそ本当に助けられました。あの美しいピアノと歌声に心が洗われて感動しました」

あまりの感動に、黒沢が菜摘の手を取って、何度も握手した。

それから慎司に、「理緒を招待するかどうかも迷って、結局招待する事にしたらこんな事になってしまって、本当に申し訳なかったよ」

「いや元々の原因は、俺だから．．．」

「お前はハッキリと理緒に何度も迷惑だと告げてるのに、あいつがいつまでも付き纏うのが悪いし、今回の事ではつきり思ったよ．．．。もう理緒とは金輪際関わりを持つのをやめる．．．。幼稚舎からの幼なじみと言う事で、今まで付き合ってたが、もう限界を超えたよ」

菜摘は複雑な心境だった．．．。

いつまでも諦められなくてしがみついた愛．．．。大きなパーティーには出入り禁止状態で、信用も失ってしまって．．．。今回の事で、とうとう友人まで失ってしまって．．．。なんて悲しい哀れな人なのだろう．．．。

理緒の事は好きになれないが．．．物悲しい人だなと思った。

「じゃああなた、今日は招待してくれてどうもありがとう」

「こちらこそ、菜摘さんに色々無理をお願いしてしまって、とても助けられたよ．．．。本当にありがとうね。」

「いやあ．．．しかし、素晴らしい奥さんでお前が羨ましいよ!!」

「そうかい？お前もいい人見つけるよ！！　じゃあな」  
慎司はちよつと鼻高々な気持ちと、それに反してちよつと萎れた気持ちと半々だった。

菜摘と結婚出来たのは本当にラッキーだったが．．．結婚の始まりが始まりだけに．．．未だに本当の夫婦とは言えない状況．．．。いつになったら．．．。  
いや焦らずに．．．今でも俺の側にいてくれるという事は、嫌われないと言う事だ．．．。

\* \* \* \* \*

帰りの車の中．．．。時間はすっかり夜中の12時を回ってしまっ  
た。

「こんな時間になってしまったね。疲れてないかい？」

「いいえ．．．。あの．．．」

「ん？」

「今日が何の日か？知ってますか？」

「ああ．．．。一年前の今日、教会で式を挙げたんだよね」

「ちよつとお願いがあるのですが．．．あの教会に寄ってもいいですか？」

「そう言えばここから近かったね．．．構わないけれど．．．」

そしてあの偽りの結婚式を挙げた教会へとやって来た。  
この教会は24時間祈りを捧げられるように解放されている。  
入り口門には守衛が常駐しているが、一言声をかけたら教会に入れ  
る。

守衛に声をかけて、2人であの教会の中に入って行った。

ツインになったトンガリ屋根のゴシック調の教会……。ステンド  
グラスがまるで宝石のように美しい……。

「あの日は……。ゆっくり教会の中を見る余裕もなくて……。凄く  
美しいですね」

「本当に……。ステンドグラスが綺麗だね。そう言えば、幸せノー  
トに”ステンドグラス”って書いてなかった？」

「恥ずかしい……。覚えていたのですね。あの日ステンドグラスに  
陽の光が当たって……。赤や青や色々な色の光が教会の中に差し込  
んで綺麗だなあって思っていました」

「あの日の事は一生嫌な思い出だね……。本当に済まなかった  
ね」

「いいえ……。私も嘘の誓いを立てて……。神様なんていない  
って心の中で呟いて……。悪い事ばかり考えてました」

「当然だよ……。俺がそう仕向けたんだからね」

「あの……。もう一度本当の気持ちを誓いませんか？」

「え？」

本当の気持ちと聞いて、ちょっと不安に思う慎司。



自分の気持ちは固まってるが、菜摘の本当の気持ちって・・・。

「もう一度、神様の前で誓いませんか？」

「菜摘は何を誓うの？」

恐る恐る聞いて見た。

「もちろん結婚の約束ですよ」

「本当にいいのかい？」

その途端、あの宝石のようなステンドグラスのように心が輝いた。

「はい・・・こんな私でも、いいですか？」

「もちろんだよ・・・感動してる」

お互いに微笑み合った。

「ちょうど今日はフォーマルなドレスを着てますし、バッグに大きなレースのスカーフが・・・」

菜摘はレースのスカーフを頭にフワリと乗せた。

「これで雰囲気が出ませんか？」

「ああ・・・凄く素敵だよ」

本当に・・・あの時も綺麗だったと思うが、今日の菜摘の方がもっと輝いて美しく見える。

二人は腕を組んで、レッドカーペットを並んで歩いて、教会の祭壇の前にやってきて、お互いに向かい合って手を重ね合った。

「私、葉山慎司は、健やかなる時も、病める時も、菜摘を愛し、敬い、生涯大切にし、添い遂げる事を誓います」

「私、葉山菜摘は、健やかなる時も、病める時も、慎司さんを愛し、敬い、生涯大切にし、添い遂げる事を誓います」

「じゃあ誓いのくちづけだ．．．」

二人は見つめ合い、優しく くちびるを交わした。

\* \* \* \* \*

朝．．．。

慎司は幸せで心満たされていた．．．やっと．．．本当の夫婦になれた．．．。

赤ちゃんは、菜摘が大学を卒業してからと話しあったが、やっと本当の夫婦に．．．。

嬉しくて嬉しくて、ついついにやけてしまった。

こら！にやけるな！！と自分に言い聞かせても、やはり目尻が下がってしまふ．．．。

隣に寄り添う菜摘は、やっと目が覚めた感じで眠い目をこすってる。

「菜摘起きた？」

「ん．．．慎司さん?!」

「菜摘．．．」

「はい？」

「愛してる．．．」

その言葉で菜摘も頭がハッキリ目覚めた。

「私も．．．愛してます」

昨夜の事を思い出したのか、真っ赤になって恥じらう菜摘。

．．．．偽りの結婚から1年．．．。

2人の愛は本物の愛に少しずつ変化していった．．．。

（第26話に続く）

第25話 あの日から1年（後編）（後書き）

今回はいよいよ最終話となる予定です。

ここまでお付き合い下さった読者様、ありがとうございました。 ^ )

^ )

## 第26話 穏やかな時間

「慎司さん．．．ここです」

交通の便のいい幹線道路沿い、イチヨウの木の街路樹が連なる広い遊歩道沿いに、ベージュのレンガタイルが素敵な6階建てのビルがあった。

「へえ．．．ここが?! 凄く素敵な雰囲気のお店だね」

” cafe 銀のスプーン” いつも菜摘から話しを聞いていたが、なかなか行く機会もなく、今日初めて店を訪れた。

「あずちゃん、こんにちは。今日は夫を連れて来たよ」

厚手のカントリー調の木のドアを開けたら、ドアチャイム（風鈴）が『カランコロン．．．』と心地良く響いた。

菜摘は迷う事なくキッチンの方に首を伸ばして、声をかける。

「あら、なつちゃんいらっしやい。これはこれは、ご主人様．．．いらっしやいませ」

キッチンからエプロンドレスを付けた、優しそうで愛らしいカフェの女店主でもある愛純あじまが現れた。

「いつもお菓子教室で、菜摘がお世話になっております。それからご主人様にもクロッキーの会でいつもお世話になっております」  
慎司がにこやかに、愛純に挨拶をした。

「いえいえ．．．とんでもありません。私の方こそいつもお世話になっております」

実は、お菓子教室と、クロッキーの会が縁となって、愛純と菜摘はすっかり意気投合し、友達関係のおつきあいをするようになり、休

日お互いの家に遊びに行ったり、ショッピングなど色々一緒に出かけたり、有名なパステル画家でもある夫（月夜野晶）の関係で、時にはパーティーで会う事もあった。

「わぁ．．．大きくなったね」

菜摘が愛純の膨らんだお腹を愛おしそうに見つめる。

「もう7ヶ月目に入ったからね．．．大分大きくなったでしょう？」  
お腹を優しく擦りながら、愛純が嬉しそうに微笑んだ。

「そうそう．．．うちも主人を呼んできますね」

「あ、あずちゃんはいいいから、椅子に座ってて．．．私が呼んでくるね」

菜摘はそう言うのと軽やかに、トントントンと階段をかけ上がって、2階画廊に消えていった。

「なっちゃん．．．鉄砲玉みたい．．．」

慎司と愛純は目を見合わせて笑い合った。

暫くしたら、賑やかに2人して階段を下りて来た。

「葉山さん．．．こんにちは！ 今日はお越し下さりありがとうございます  
ございます。ゆっくりしていただいて下さいね」

「月夜野さん、いつも菜摘がお世話になっております。受験の時には色々ご指導下さりありがとうございます．．．」

「いえいえ．．．菜摘さんにとっては優秀で、元々才能がある人だから、私が教えなくても何の問題なく受かってましたよ」

「そんな事ありませんよ、月夜野さんのお陰です」

愛純と菜摘は友達同士で気さくだが、パーティー会場などで面識はあっても慎司と晶の方は、まだ固い雰囲気だ……。だが暫くしたら、意気投合し、話しも弾み……。4人で楽しい時間を過ごした。

「愛純さんのお菓子は上品な甘さで、とても美味しいですね。普段あまり甘い物を食べない慎司だが、愛純の焼き菓子は凄く気に入った様子……。」

「ありがとうございます。お腹も大きくなって来ましたし、このお店、暫くは、おばとスタッフに任せてゆっくりしようと思ってるんです。なっちゃんは洋裁が得意だから、可愛らしいベビー服を色々作ってくれたんですよ。もう……。本当に嬉しくて……。今度、素敵なおベビードレスまで作ってくれるそうで、とても楽しみです。今日のご主人様のシャツももしかして手作りですか？」

「実は……。色々作ってくれてね……。色合いも良いし着心地も良いし、愛用してます」

今日の慎司の装いは、菜摘手作りのリネンの草木染めの淡いグリーンシャツとコットンパンツに、モックスタイルのビッグスキングザーシューズ。いつも休日は、菜摘のお手製シャツに合わせたナチュラルファッションが多い。

「わぁ……。いいですね。私はソーイングは苦手なので……。なっちゃんに色々習ってます」

「僕にもいつかシャツを作ってくれないかな？」  
晶が少し茶化すように、愛純に言った。

「は〜い！！頑張ります」

愛純が苦笑いして手を上げた。

皆で楽しい一時を過ごした．．．帰り際、慎司は月夜野のギャラリーによって、早速絵を購入．．．。

五色沼の風景画を数枚と、菜摘の部屋にとアネモネの花をモチーフにしたパステル画を購入した。

\* \* \* \* \*

その日の夜、慎司と菜摘はベッドの中で、今日あった事などあれこれお喋りに花が咲いていた。

「月夜野さんご夫婦は仲がいいし、素敵な人達だね．．．」

「でしょ？ 慎司さんともすぐ気が合うんじゃないかなって思っていました」

「うん。今日はとても楽しかった．．．」

「あのアネモネの絵．．．ありがとございます。お部屋の雰囲気にとてもピッタリで嬉しいです」

「月夜野さんの絵は素敵だよね．．．。そうそう．．．月夜野さんが言ってたけどね、アネモネの花言葉．．．。『清純無垢』『無邪気』って言う意味もあるらしいよ．．．。なんだか菜摘っぽいな．．．」

「なんか照れます．．．」



「それからね．．．あの絵のように赤いアネモネは『君を愛す』って花言葉らしい．．．。『真実の愛』っていう花言葉もあるそうだよ．．．。だから、悲しい花言葉ばかりじゃないんだよ」

「『真実の愛』いい言葉ですね．．．」

菜摘がいつも付けている、慎司からプレゼントされたエンジェルとアネモネの花のネックレスを、指で触りながら言った。

「最近ね．．．『幸せノート』は全然開いてないんですよ」

「えっ？どうして？」

「今の自分の生活が幸せだから．．．もう必要ないんです。もう心を凍らせる事も必要ないし．．．現実逃避してあれこれ想像する事も必要ないし．．．」

「じゃあ、菜摘の背中には羽根がついて飛べるようになったのかな？」

「はい．．．。もうふわふわしてます」

「嬉しいね．．．でもそのまま遠くには飛んでいかないですよ」

「行きませんよ〜」

お互いに額をくっつけて合つてクスクスと笑い合った。

「そう言えば．．．慎司さん、前はずっと背を向けて寝ていたのに．．．最近違いますね．．．」

「全然気がつかなかったの？」

「え？」

「それはね．．．あの教会で本当に誓い合うまでは、毎晩背を向けて菜摘の存在は記憶から消し去っていたんだよ」

「え？」

「ほら．．．俺だって男だからね．．．襲っちゃったら不味いでしょ？」

「え？」

「でも．．．もう．．．本当の夫婦だからにも問題ないでしょ？」

「そうだったの？」

「もう菜摘は．．．人の苦労も知らずに暢気なんだから．．．」

お互いに、抱きしめ合ってクスクス笑い合った。

(第27話に続く)



第26話 穏やかな時間 (後書き)

完結の予定でしたが、もう少し話しが続きそうです。(^^) スミマセン!!

## 第27話 翼を広げてあなたと・・・

偽りの愛だったこの結婚が、真実の愛に変化していつてから、どのぐらい時が過ぎただろうか・・・。

若すぎて、花嫁にしてはまだ早すぎる年齢で、愛のない政略結婚の道具とされて、痛々しい雰囲気にも見えた菜摘は、キラキラと目を輝かせ、充実した日々を送る素敵な大人の女性へと変化いや・・・成長していった。

変化というよりは成長したと言っ言葉の方が当てはまるようにも思える。

「・・・と言ってもまだ23歳・・・これからまだまだ大きく花開き、生き生きと希望に満ちあふれ、輝きを放っている雰囲気だ・・・。」

菜摘は今、大学を卒業し、水彩画家として個展を開いたり、絵本、出版物の挿し絵、時には広告のデザインなどと色々幅広くフリーで頑張っている。

画廊『月夜の夢』にも、いつも数点作品を取り扱ってもらって、売れ行きも好調・・・。

そして今日は、『レストランテ・クロサワ』の店内に飾る絵の注文を受け、慎司と一緒にレストランにやって来ていた。

「・・・で、サイズとしては2号ぐらいの小さな絵を10点お願いしたいのですが・・・。」

黒沢が、飾る壁面の位置とイメージ、サイズなどを細かく菜摘に話していた。

「おいおい・・・多すぎないか？」

最近頑張りすぎて、徹夜も多い菜摘の事を心配して、慎司は心配そうに口を挟んだ。

「今抱えている仕事は一段落しましたし、少しづつ仕事をセーブして来ますから大丈夫！ 黒沢さんの絵の仕事が終わったら、暫くのんびりしようと思ってますから．．．」

「慎司も菜摘さんの事となると、もうメロメロだなあ」  
ニヤニヤにやけながら、黒沢が茶化す。

「そんなくだらない事言っていないで、お前も早く嫁さん見つけるよ！」  
少し照れながら、ブスツと黒沢をにらみ付ける慎司。

そのキツイ言葉には、黒沢も凹む．．．。  
菜摘がいい大人年齢になったと言う事は、慎司も黒沢も、33歳のいいおじさん年齢となった事だ．．．。

「その言葉は刺さるなあ」。菜摘さん．．．優香さんの事、宜しく頼むよ．．．」

「は．．．はあ．．．」

実は黒沢は、菜摘の大学からの友人”優香”の事が好きになってしまっただけで、その子が菜摘と一緒にクロッキーの会に入ってる事を嗅ぎつけて、クロッキーの会にまで入って一生懸命アプローチ中なのだ．．．。

菜摘が思うのに、優香の方は黒沢に対して悪い印象は持っていないものの、まだ恋愛対象としては考えてない雰囲気微妙な所なのだ．．．。

「頼んだよ．．．」  
なんとも情けない声を出す黒沢．．．。

「一応デートの事話しておきますが、その後の事は責任持てませんよ．．．」

「分ってる．．．」  
本当に、あのちょっと癖のあるアクのあるような、ちょっとぶてぶてしい雰囲気黒沢は何処に行ってしまったのか．．．。

ここにいるのは自信を失った、腫れ物に触るような痛々しいチビ黒沢という感じだ．．．。

「おい！！しっかりしろよ！！お前のいつものあの態度のデカイ、メガ黒沢はどこに行ったんだ！！」

慎司が喝を入れようとするが、効果なさそうだ．．．。

「慎司さん．．．まあまあ．．．。黒沢さんが益々萎れてきてますよ．．．」

菜摘の一言に益々マイクロ黒沢になってしまった．．．。  
菜摘と慎司お互いに顔を見合わせて、これは早々に退散した方がよさそうだ和阿吽の呼吸で目で合図し合った。

その後、お店を退散してから、悪いとは思ったものの、あの自信家の様な黒沢の萎れた姿が可笑しくて、2人で笑い合ってしまったのは言うまでもない。

\* \* \* \* \*

それから黒沢のオーダーの絵も完成し納品。

これからは暫く仕事をセーブして、のんびりと過ごそうと思っ  
た。と言うのも、大学を卒業したら赤ちゃんが欲しいねと、慎司と  
2人で話し合って決めていたから．．．もしかしたらもう妊娠して  
るかもしれない．．．。  
というのも、なんとなく最近体が怠くて食欲が湧かないのだ。

(そう言えば生理が遅れてる．．．もしかして?!)

産婦人科で検査したら、妊娠反応があるものの、超音波で胎囊が見  
つからないらしかった．．．。

子宮外妊娠の可能性があるようだった．．．。

一週間様子を見て、また病院に行く事になった．．．。

凄くシヨックだった．．．それにもし子宮外妊娠だったらと思うと  
怖い．．．。

慎司にははつきり妊娠が分ってから話そうと思った．．．。

天国から地獄とはこう言う事なのだろうか．．．いえ．．．まだそ  
う決まった訳ではない。

まだ確認出来ないだけで、子宮には赤ちゃんがいてスクスク育つて  
きているのかもしれない．．．。

もし子宮外妊娠だったら．．．悲しい知らせを慎司に話さなくては  
いけない．．．。

凄く気が重かった．．．。

神様．．．どうか、そんな風にはなりませんように．．．。

菜摘は心の中で一生懸命祈った。

ふと昔の事を思い出した。

慎司と偽りの結婚式を挙げた日の事．．．。

神の前で偽りの愛を誓い、神様なんていない!!と自分の運命を呪  
った．．．。



あの時の罰を今受けてるの？  
とても心細く不安に思った。

菜摘の様子がおかしい事に慎司はすぐに気がついた。

「なんだか元気が無いみたいだけれど、どうかしたの？」

「あ．．．ううん．．．仕事から解放されてちよつと気が抜けちゃ  
っただけ．．．。大丈夫ですよ！！」

まだ話せない．．．。無理に作り笑いをして元気を装った。

．．．そして一週間後また産婦人科に行った．．．。

「葉山さん、分りますか？」

産婦人科の先生からエコーの画像を見せてもらって、子宮の中には  
つんと黒く丸い胎嚢に、その中に白いリングの卵黄嚢も見えた。  
ピクピクと心臓が動いているのもはっきり見えた。

「はい．．．分ります」

嬉しくて涙が溢れた。

．．．家に帰って早速慎司に嬉しい報告をした。  
病院でもらったエコーの写真を見せる。

「大きさは約12mmで、重さは4gですって．．．」

慎司は少し涙目になりながらも喜んで．．．。

何度も何度もエコー写真を見ながら．．．本当に嬉しそうだった．．．  
。

「菜摘．．．どうもありがとう．．．なんかありがとうと言うのも  
変なんだが．．．嬉しくて、幸せで、君と一緒になれて本当に良か

った。俺達父親と母親になるんだな．．．。本当に凄く嬉しいよ！  
！」  
慎司が菜摘の手を取りながら、何度も何度も「ありがとう．．．嬉しい」と言った。

「私の方こそ、ありがとうございます。凄く幸せで、嬉しいです．．．。本当に幸せです」

菜摘の幸せノートの2冊目からは、いつの間にか、慎司との思い出アルバムに変化した。  
アルバムの1ページ目は、あの偽りの結婚式の時の2人とも笑っていない写真．．．。  
今では笑い話になってしまいそうな、2人の原点のような懐かしい写真。

それから次は、2人の色々な思い出写真．．．いつの間にかこんなに沢山増えて、冊数も増えていった．．．。  
今度は新しく家族アルバムが始まるんだ。  
1ページ目は、あのエコー画像コピーを色褪せないようにスキャナーでとってプリントしてアルバムに貼った。  
子供が生まれて大きくなったら見せてあげよう．．．。  
パパとママが、どんなに愛してるか．．．生まれてきてくれてどんなに嬉しかったかも、お話ししてあげよう．．．。

\* \* \* \* \*

孤独で淋しいアネモネは、もう淋しくもないし、毎日が幸せ．．．。  
『天国のお母さん、お母さんが願ってくれたように、人生が、温かな光に包まれた喜びと幸せに満ちあふれた日々ですよ。』

父の事ももう恨んでません。会う事はないと思いますが．．．理由はどうであれ慎司さんと巡り合わせてくれた事に感謝してます。そ

れに父と母がいなければ、私は生まれて来れなかったから・・・感謝してます。

命がけて生んでくれたお母さんには本当に感謝してます。

それから私を育てて下さったリラ先生、園の先生方、園に来て下さって色々教えて下さったボランティアの先生方、スタッフの皆さん・・・改めて心からありがとうって言いたい。

特にリラ先生は、私のもう一人のお母さん・・・。  
赤ちゃんが産まれたら、子育ての事、色々教えて貰おう・・・。

他にも・・・月夜野さん、あずちゃん・・・。黒沢さんも・・・。  
私のお兄ちゃん、ヒロにい・・・。

1番感謝は、優しい旦那様 慎司さんネ・・・。」

菜摘はベビードレスを縫いながらフツと微笑んだ・・・。  
気がつけば、自分の回りには愛で溢れて幸せに溢れていたんだわ・・・。

「あーっ。菜摘はまた妄想してるね!!」  
気がつけば、慎司がカウチソファに腰掛けながら嬉しそうに微笑んでいた。

「もうっ!!またノックしないで・・・。ねえ、このベビードレス可愛いでしょ?」

「うんうん・・・すごくいいな。これを着せてお宮参りが楽しみだね・・・。」

・・・気がつけば、愛と幸せに溢れていて、翼の生えたアネモ

ネは微笑んでました・・・。

END

第27話 翼を広げてあなたと・・・(後書き)

最終話近くになって、急ピッチで終わらせてしまってますみません。  
放置にならず、何とか終わらせる事が出来てホッとしています。

最後までお付き合い下さった読者様、ありがとうございました。  
感謝致します。(^^)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4791u/>

---

アネモネの翼～真実の愛に目覚めて...

2011年8月5日15時15分発行